

I 上箕田遺跡(第3次)・上箕田城跡

1 調査の経過

上箕田遺跡は、鈴鹿市上箕田町に所在する弥生時代を中心とした遺跡である。発掘調査は、昭和45年度県営圃場整備事業に伴う第3次調査で、排水路部分3カ所の範囲確認調査（調査時の名称は試掘調査）を昭和45年12月上旬に行った。その結果、2カ所の本調査を昭和45年12月下旬に行った。

遺構図の作成は、すべて1/20作図の手描実測を行った。また写真撮影は、35mmカラーリバーサルおよび白黒フィルムで適宜行った。

なお、第3次調査については三重県教育委員会『昭和45年度県営圃場整備事業地内上箕田遺跡調査概報』1971年が刊行されており、今回の報告をもって本報告とするが、調査にかかる経緯にかんしては、概報を参照されたい。このほか、第3次調査時に試料採取が行われた安田喜憲氏による上箕田遺跡の自然環境分析の成果が公表されている。⁽¹⁾

2 位置と環境

上箕田遺跡は、流域面積約300km²ほどの規模を持つ鈴鹿川の下流域南岸に広がる沖積低地に立地し、現在の海岸線からは約2km内陸部に位置し、上箕田城は上箕田遺跡東部に位置する。

上箕田遺跡は弥生時代の遺跡として著名な遺跡であり、昭和35年の第1次調査以来、発掘調査が複数回にわたって実施されている。また、上箕田城跡は室町時代の伊勢守護であった土岐（世保）氏の本拠地であり、上箕田遺跡東部に推定されている。

平成21年現在において、最新の発掘調査である第7次調査の報告に周辺環境および調査時数ごとの成果がまとめられていることから、詳細は三重県埋蔵文化財センター『上箕田遺跡（第7次）発掘調査報告』2008年を参照されたい。

3 調査区の概要と遺構

本調査を行った2カ所のうち、西南部に位置する地区をA地区とし、東部の調査区をB地区（上箕田城跡）として報告する。

（1）A地区

1×136mの東西に長い調査区であり、その間は西から2m単位のグリッドが設定された。

調査区の基本層序 概報に大別層序が掲載されていたことから踏襲し、複数層に分かれる場合は細分した。細分については、出土遺物の遺物ラベルにアルファベットの記録が残っていたことから、アルファベットを用いて対応させた。I-A層は耕作土、I-B層は床土であり、まれに山茶椀片が出土した。II-A層は灰褐色粘質土層、II-B層は黄褐色粘質土層であり、無遺物層である。III層は細砂を含む暗茶褐色土層であり、弥生土器を多量に含む。IV-A層は青黒灰色砂層、IV-B層は黒褐色粘質土層であり、多量の弥生土器のほかに木製品及び自然木も含む。IV層は上部に砂粒を多く含み、下部ほど細かく特徴がある。時期的には、弥生時代前期・中期の遺物を含む。V-A層は褐色ブロックの混じる灰色土層、V-B層は青灰色砂層であり、地山とされる。

遺構 今回の報告にあたり新たに遺構番号を与え、第3図に示した。また、各遺構の平面図は土木ケバで作図されていたが、基本的に断面図と対応している点と土坑SK6の遺物出土状況写真と概報の記述が対応したことから、遺構と判断した。

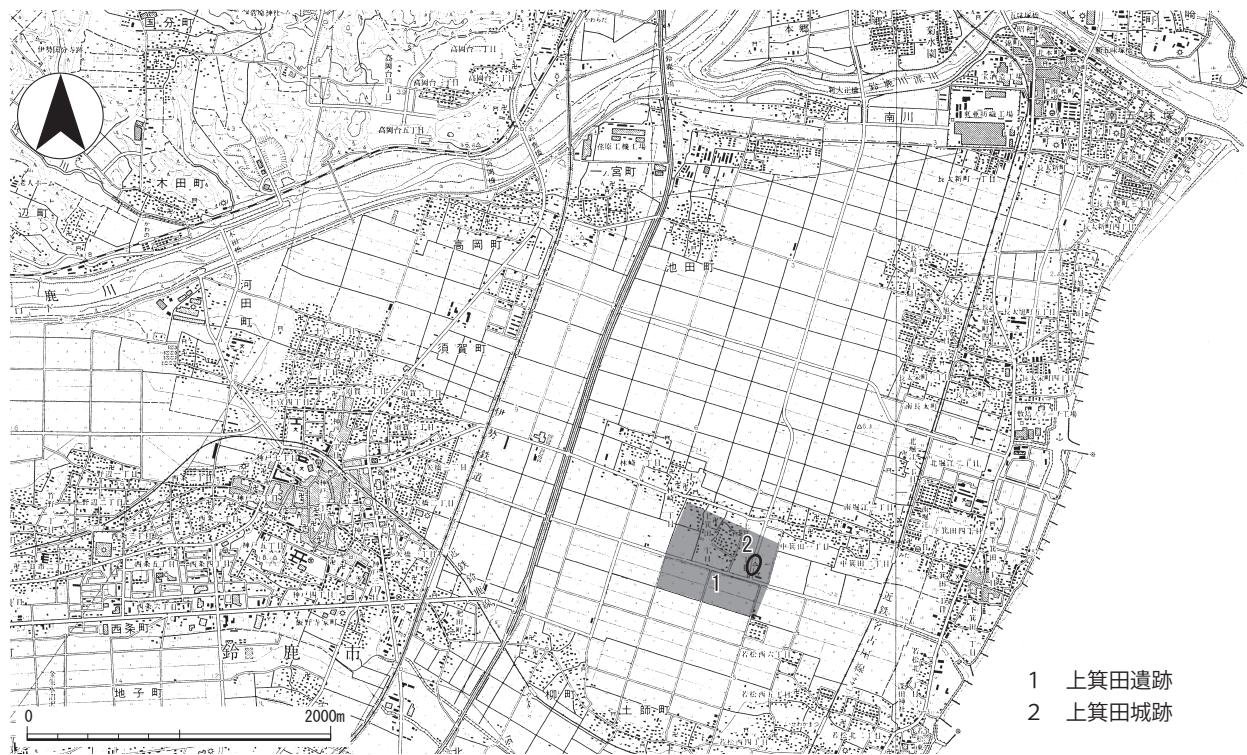
土坑SK6 61・62グリッドで確認された土坑であり、IV-2層から木製の一本鋤未製品2本が横位の状態で出土した。

（2）B地区（上箕田城跡）

上箕田城跡に相当する地点において、1×2mのトレンチが12カ所設定された。第3図はこのうちの11カ所分の断面図であり、報告にあたりグリッド名を南からアルファベットで与えた。

調査区の基本層序 1層は表土（耕作土）である。2層は暗褐色土層であり、土器片を含む。3層は黒褐色土層であり、無遺物層である。4層は砂を含む黄褐色土層である。5層は黄褐色砂層である。

調査区の概要 山茶椀や土師器片が採取されたのみである。また調査時には、前方後円墳である可能性も想定されていたが、検出されなかった。⁽²⁾

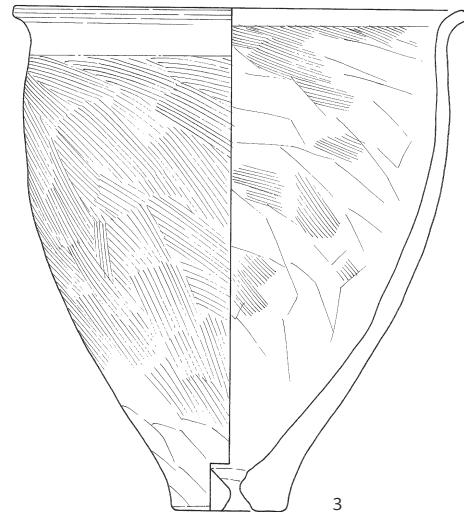
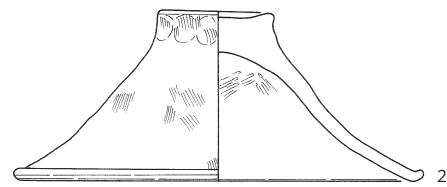
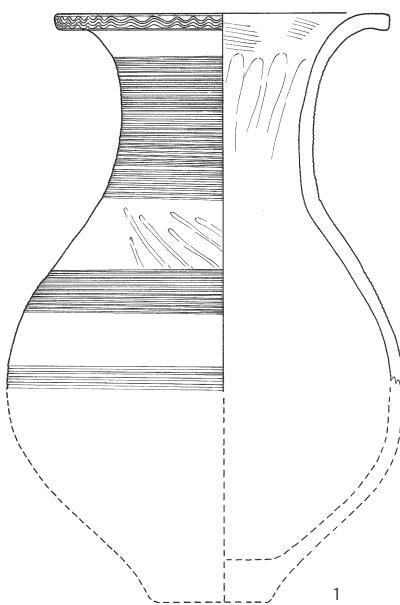


第1図 上箕田遺跡位置図 (1:50,000) (国土地理院 1:25,000「鈴鹿」から)

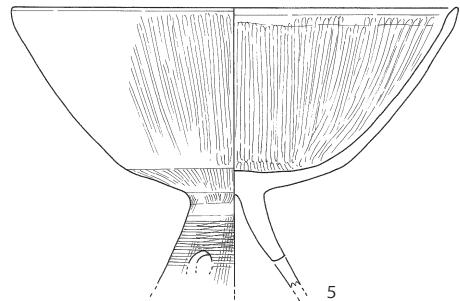
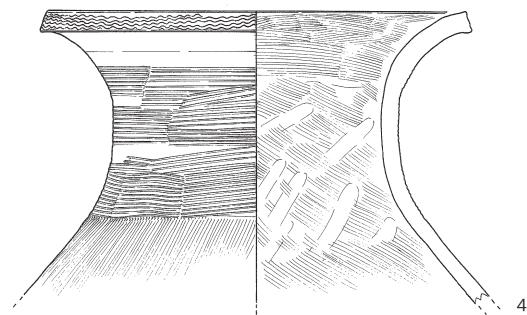


第2図 調査区位置図 (1:5,000)

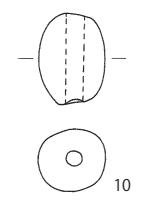
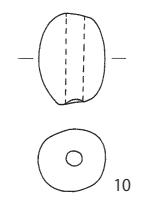
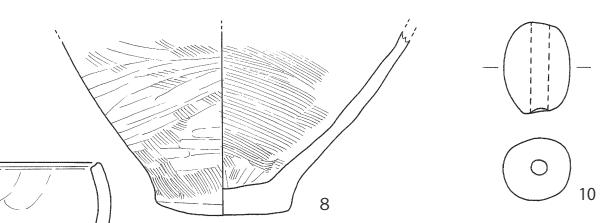
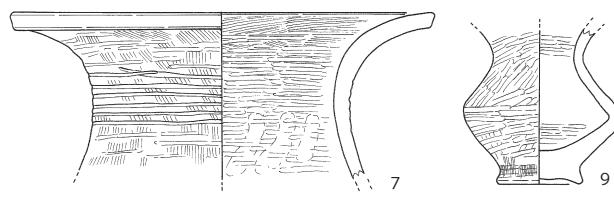
SK(1~3)



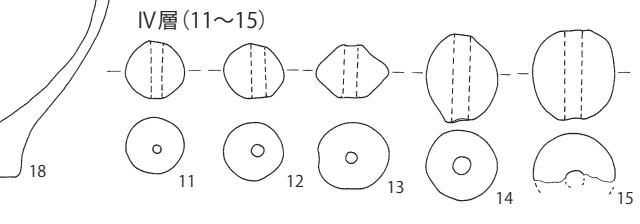
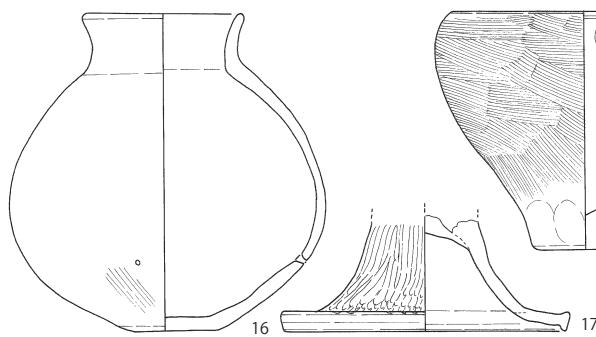
SZ(4・5)



IVB層(7~10)



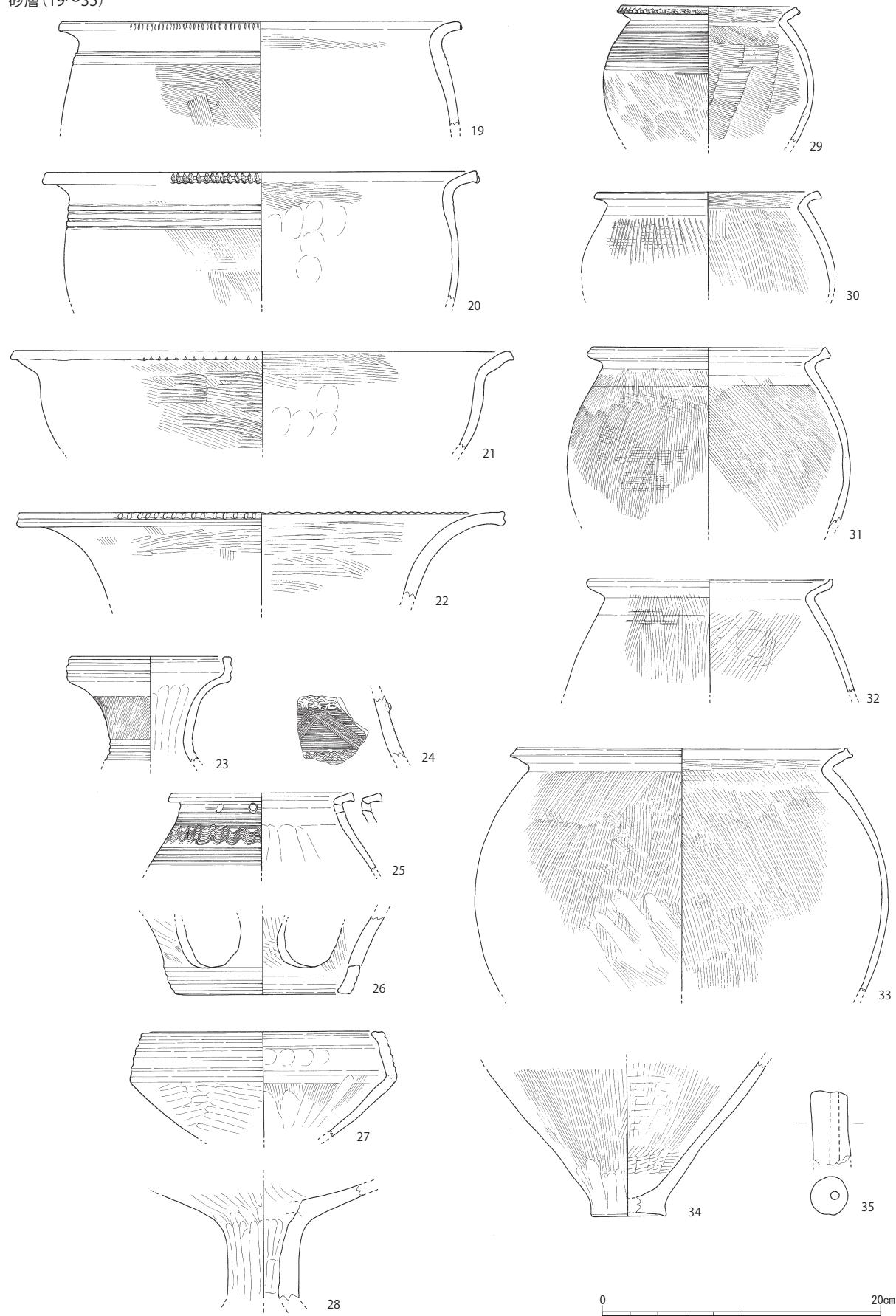
III層(16~18)



0 20cm

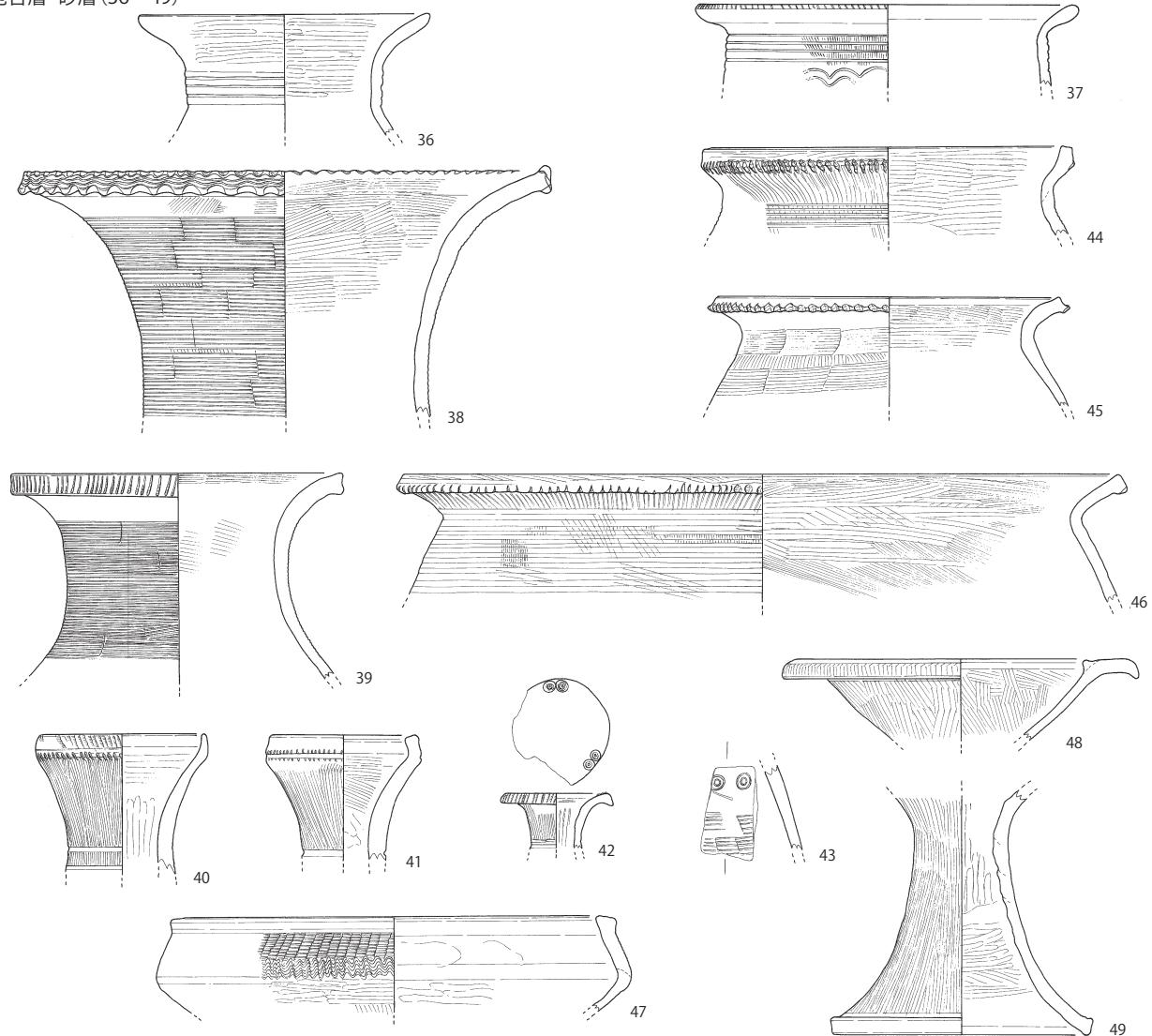
第4図 出土遺物実測図 (1) (1:4)

砂層(19~35)

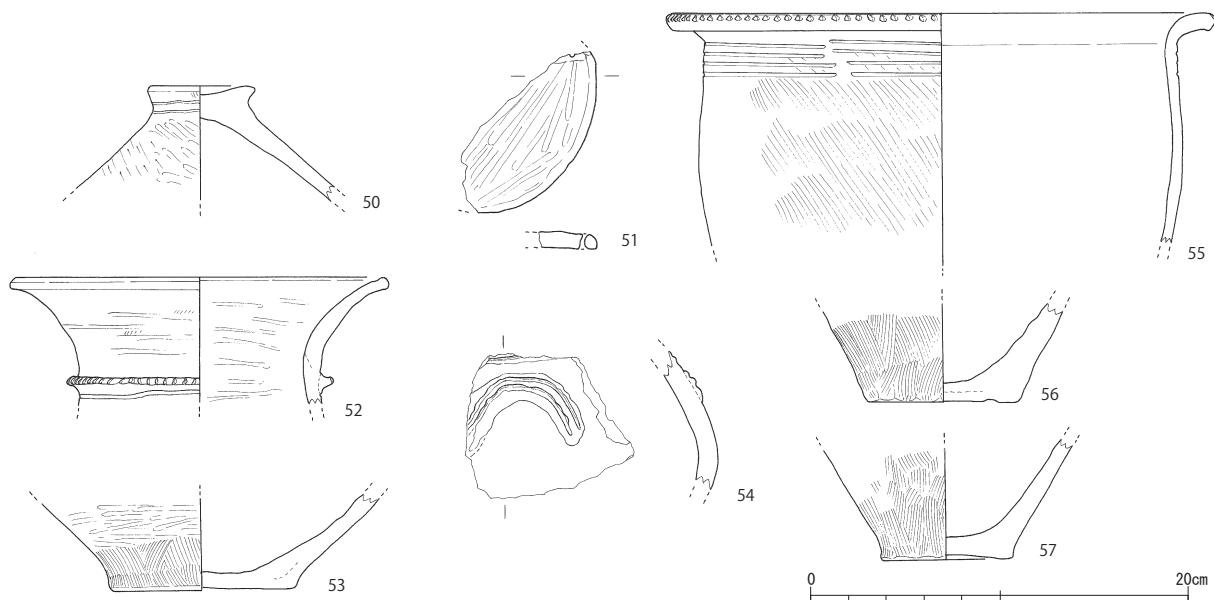


第5図 出土遺物実測図(2) (1:4)

包含層・砂層(36~49)

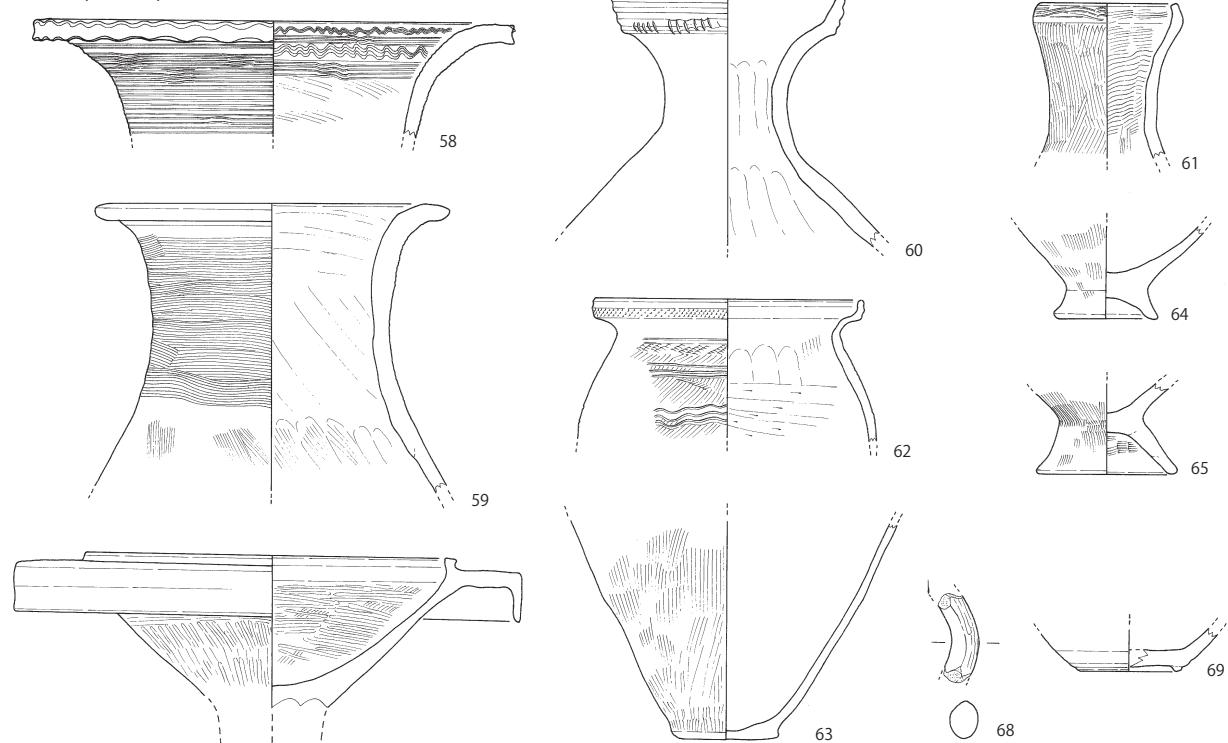


包含層(50~57)

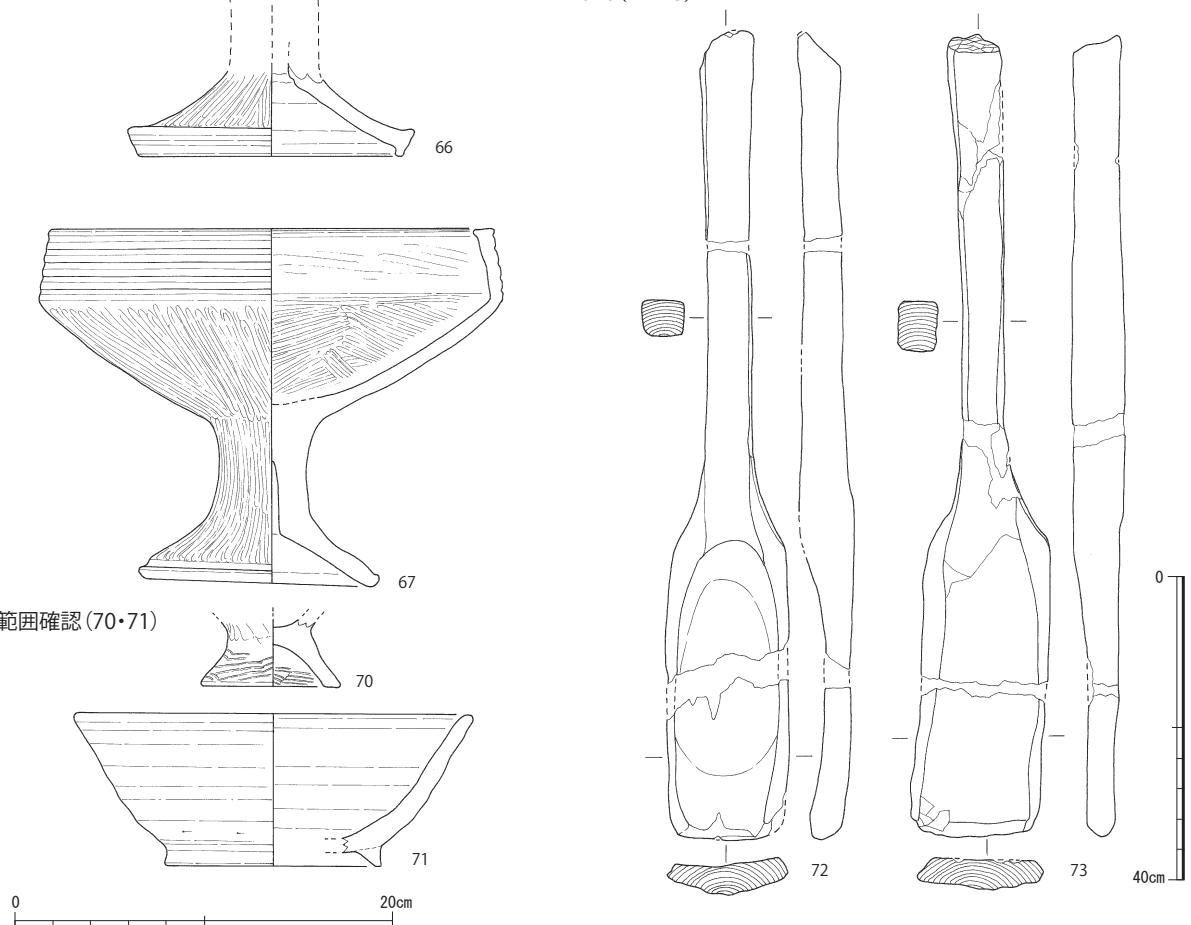


第6図 出土遺物実測図(3) (1:4)

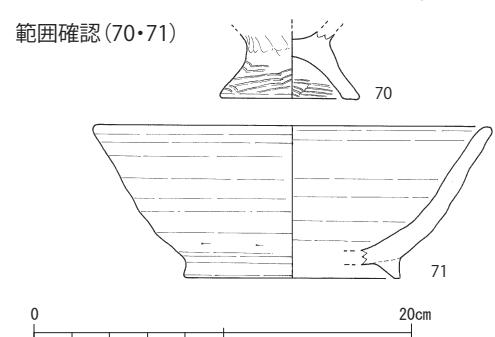
包含層等(58~69)



SK6(72・73)



範囲確認(70・71)



第7図 出土遺物実測図 (4) (72・73は1:10、その他は1:4)



第8図 出土遺物実測図(5) (74・80~82は2:3、その他は1:3)



第9図 出土遺物実測図 (6) (90・98・99・101は2:3、その他は1:3)

報告番号	実測番号	旧実測番号	器種類等		調査区	グリッド	遺構・層位等	計測値(cm) □径	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
			質	器形									
1	501	R5	弥生土器	壺	A		SK1	17.7	貝殻による施文	密	にぶい橙7.5YR6/4	8/12	外面に煤付着
2	102	R8	弥生土器	甕蓋	A		SK1	21.8	ハケ	密	灰白5YR8/1	10/12	内外面に煤付着
3	201	R2	弥生土器	甕	A		SK1	23.9	ハケ	密	にぶい橙7.5YR7/4	8/12	外面に煤付着
4	803		弥生土器	壺	A		SZ	22.6	貝殻による施文	密	灰白2.5Y8/1	4/12	
5	801		土師器	高杯	A		SZ	23.4		密	にぶい黄橙10YR7/4	4/12	
6	902		弥生土器	甕	A	22・23	Pit	27.0		密	にぶい橙5YR7/4	3/12	外面に煤付着
7	101	R7	弥生土器	壺	A	63	IVB	22.3	ヘラ描き沈線	密	暗灰N3/0	10/12	外面に煤付着
8	1901		弥生土器	壺	A	57	IVB	底7.2	ヘラミガキ	密	黄灰2.5Y5/1	12/12	
9	502	R6	弥生土器	壺	A	62・63	IVB	底4.6	ヘラミガキ	密	灰黄2.5Y6/2	10/12	
10	602	R10	土師質	土錐	A	65	IVB	4.8×3.5 重53.49g		密	灰N4/0	完存	
11	606	R14	土師質	土錐	A	62	IV	3.0×3.1 重27.14g		密	褐灰10YR6/1	完存	
12	605	R13	土師質	土錐	A	61	IV	2.9×3.1 重26.83g		密	褐灰10YR6/1	完存	
13	604	R12	土師質	土錐	A	61	IV	2.8×3.8 重33.04g		密	灰白2.5Y7/1	完存	
14	601	R9	土師質	土錐	A	65	IV	4.7×3.8 重58.66g		密	灰白2.5Y7/1	完存	
15	603	R11	土師質	土錐	A	65	IV	4.7×4.3 重47.35g		密	灰白2.5Y7/1	6/12	
16	402	R4	弥生土器	壺	A	7	III	8.5		やや密	にぶい黄橙10YR6/4	10/12	
17	2103		弥生土器	高杯	A	56	III	15.2	ヘラミガキ	密	灰白10YR8/1	3/12	
18	401	R3	弥生土器	鉢	A	56	III	14.2	ハケ	密	にぶい黄橙10YR7/2	5/12	焼成後穿孔 外面に煤付着
19	1502		弥生土器	甕	A	63	砂層	29.0	ヘラ描き沈線	密	黄灰2.5Y4/1	2/12	外面に煤付着
20	1404		弥生土器	甕	A	63	砂層	31.2	ヘラ描き沈線	密	黄灰2.5Y4/1	1/12	外面に煤付着
21	1503		弥生土器	鉢	A	63	砂層	36.0	ハケ	密	にぶい橙7.5YR7/4	2/12	
22	1701		弥生土器	壺	A	63	砂層	34.8	ヘラミガキ	密	灰黄2.5Y7/2	2/12	
23	1401		弥生土器	壺	A	62	砂層	11.6	凹線文	密	にぶい黄橙10YR6/3	12/12	
24	1704		弥生土器	壺	A	65	砂層	—	櫛描文	密	にぶい黄橙10YR6/3	—	
25	1003		弥生土器	壺	A	62	砂層	13.3	櫛描文	密	浅黄橙10YR8/3	4/12	焼成前穿孔2力所
26	1203		弥生土器	台付無頸壺 または台付鉢	A	62	砂層一括	底12.6	ナデ	密	にぶい黄橙10YR6/3	3/12	黒斑有り
27	1002		弥生土器	高杯	A	62	砂層一括	17.4	凹線文	密	暗灰黄2.5Y5/2	2/12	
28	1201		弥生土器	高杯	A	62	砂層一括	脚柱5.0	ヘラミガキ	密	灰褐7.5YR5/2	6/12	
29	1102		弥生土器	甕	A	62	砂層	13.0	ハケ	密	にぶい黄橙10YR7/2	3/12	外面に煤付着
30	1702		弥生土器	甕	A	63	砂層	16.2	タタキ後ハケ	密	にぶい黄橙10YR5/3	1/12	外面に煤付着
31	1101		弥生土器	甕	A	62	砂層	17.3	タタキ後ハケ	密	灰黄褐10YR6/2	3/12	口縁部内面から 外面に煤付着
32	1703		弥生土器	甕	A	63	砂層	17.6	タタキ後ハケ	やや密	灰黄褐10YR6/2	2/12	外面に煤付着
33	1001		弥生土器	甕	A	62	砂層	24.4		密	にぶい黄橙10YR7/3	3/12	外面に煤付着
34	1103		弥生土器	甕	A	62	砂層	5.2	ハケ	密	にぶい黄橙10YR7/2	4/12	内面に炭化物付着
35	1204		土師質	土製品	A	62	砂層一括	径2.75	ハケ	密	にぶい黄橙10YR7/3	—	外面に煤付着
36	1403		弥生土器	壺	A	60	包・砂層	16.4	削り出し ヘラ描き沈線	密	にぶい黄橙10YR6/3	2/12	
37	1501		弥生土器	甕	A	64	包・砂層	21.5	ヘラ描き沈線	密	褐褐7.5YR4/1	2/12	外面に煤付着
38	1602		弥生土器	壺	A	64	包・砂層	30.0	貝殻による施文	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	2/12	
39	1603		弥生土器	壺	A	57	包・砂層	18.7	貝殻による施文	密	にぶい黄橙10YR7/2	8/12	
40	1302		弥生土器	壺	A	61	包・砂層	9.7	沈線	密	黄灰2.5Y5/1	10/12	
41	1604		弥生土器	壺	A	59	包・砂層	8.5	沈線	密	にぶい黄橙10YR6/3	5/12	
42	1402		弥生土器	壺	A	59	包・砂層	6.3	沈線	密	にぶい黄橙10YR7/3	4/12	
43	1705		弥生土器	壺	A	64	包・砂層	—	竹管文	密	にぶい黄橙10YR6/3	—	
44	1205		弥生土器	甕	A	62	包・砂層	20.8	ハケ	密	黒褐2.5Y3/1	2/12	外面に煤付着
45	1104		弥生土器	甕	A	62	包・砂層	20.3	ハケ	密	灰黄褐10YR6/2	3/12	外面に煤付着
46	1301		弥生土器	甕	A	60	包・砂層	41.0	ハケ	密	灰黄褐10YR5/2	2/12	外面に煤付着
47	1202		弥生土器	高杯	A	61	包・砂層	25.0	櫛描文	密	灰黄褐10YR5/2	2/12	
48	1601		弥生土器	高杯	A	64	包・砂層	20.0	ハケ	密	黒褐2.5Y3/1	5/12	外面に煤付着
49	1303		弥生土器	高杯	A	61	包・砂層	脚裾15.0	ハケ	密	にぶい黄橙10YR6/3	4/12	
50	1804		弥生土器	壺蓋	A	55	包	摘要5.6	ヘラミガキ	密	褐褐7.5YR5/1	8/12	
51	2003		弥生土器	壺蓋	A	36		—	ヘラミガキ	密	にぶい黄橙10YR7/2	3/12	
52	2004		弥生土器	壺	A	7		20.0	貼り付け突堤	密	にぶい橙5YR7/4	1/12	
53	1903		弥生土器	壺	A	63	包	底9.8	ヘラミガキ	密	灰黄褐10YR6/2	8/12	
54	1802		弥生土器	壺	A	69		—	削り出し ヘラ描き沈線	密	灰黄2.5Y7/2	—	
55	1904		弥生土器	甕	A	69		29.0	半裁竹管	密	褐褐10YR4/1	5/12	外面に煤付着
56	1803		弥生土器	甕	A	63	包	底7.6	ハケ	密	にぶい黄2.5Y6/3	3/12	
57	1806		弥生土器	甕	A	63	包	底7.0	ハケ	密	にぶい褐7.5YR6/3	8/12	内面に炭化物付着
58	2201		弥生土器	壺	A	56		25.4	貝殻による施文	密	にぶい橙5YR7/4	3/12	
59	2202		弥生土器	壺	A	56		18.6	貝殻による施文	密	浅黄橙7.5YR8/3	5/12	
60	2102		弥生土器	壺	A	52		12.3	刻目	密	褐褐7.5YR6/1	12/12	
61	2101		弥生土器	壺	A	39		7.4	ハケ	密	灰白10YR8/1	12/12	
62	2005		弥生土器	甕	A	35		14.3	櫛描文 ヘラケズリ(内面)	密	淡赤橙2.5YR7/3	2/12	
63	1902		弥生土器	甕	A	32		底5.6	ハケ	密	灰白2.5Y8/1	12/12	外面に煤付着
64	1805		弥生土器	甕	A	63	包	底5.4	ハケ	密	褐褐10YR4/1	12/12	外面に煤付着
65	2001		弥生土器	甕	A	7		底7.4	ハケ	密	灰白10YR7/1	12/12	
66	701	R38	弥生土器	高杯	A			19.6	ヘラミガキ	密	橙5YR7/6	10/12	
67	301	R1	弥生土器	高杯	A			23.5	凹線文	密	褐褐10YR5/1	6/12	外面に煤付着
68	2002		土師質	土製品	A	59		径1.9	ヘラミガキ	密	明褐褐7.5YR7/2	—	
69	1801		山茶椀	椀	A	17	包	5.0		密	灰白2.5Y8/1	3/12	
70	802		弥生土器	甕	A	6	試掘	底7.3		密	にぶい黄橙10YR7/2	12/12	
71	901		山茶椀	椀	B	12	試掘	21.0		密	灰黄2.5Y7/2	1/12	

第1表 出土土器観察表

報告番号	実測番号	旧実測番号	調査区	グリッド	遺構・層位等	種類	全長(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	樹種	残存度	備考
72	木101	報36(5)	A	61・62	SK6	一木鋤	107	刃:50 柄:57	刃:16 柄:5.5	刃:4 柄:4.5	広葉樹	ほぼ完存	未製品、註(4)掲載第5図1
73	木102	報37(6)	A	61・62	SK6	一木鋤	106	刃:49 柄:57	刃:17 柄:5.5	刃:5 柄:6.5	広葉樹	ほぼ完存	未製品、註(4)掲載第5図2

第2表 出土木器観察表

報告番号	実測番号	旧実測番号	調査区	グリッド	遺構・層位等	種類	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	残存度	備考
74	2705	R17	A	60	IV	打製石鎌	4.2	1.7	0.5	2.86	サヌカイト	基部欠損	
75	2502	R22	A	62	IV	両刃石斧	(10.4)	(5.6)	(3.2)	(325)	ハイアカシタイト	欠損	
76	2603	R24	A	66	IV	扁平片刃石斧	6.1	5.0	1.3	61.46		—	再利用の可能性有
77	2401	R33	A	61	IV	磨石	(12.0)	(9.6)	(2.2)	(323)	砂岩	—	
78	2601	R35	A	61	IV	砥石	7.3	7.0	5.0	64.72	軽石	—	
79	2402	R34	A	59	IV	敲石	6.2	6.1	4.8	250	砂岩	完存	
80	2704	R20	A	33	III	打製石鎌	2.7	2.1	0.3	1.65	サヌカイト	先端部欠損	
81	2703	R19	A	11	III	打製石鎌	3.0	1.2	0.45	1.39	サヌカイト	先端部欠損	
82	2706	R18	A	32	III	打製石鎌	4.0	1.2	0.5	2.83		—	未製品?
83	2604	R27	A	43	III	抉入柱状片刃石斧	10.8	3.0	3.2	201.57		ほぼ完存	刃こぼれ有
84	2701	R26	A	49	III	扁平片刃石斧	4.6	3.2	0.9	26.23		ほぼ完存	
85	2403	R30	A	62	III	石材	4.2	3.9	1.5	36.12	ハイアカシタイト	—	
86	2503	R28	A	16	III	大型直線刃石器	(22.0)	8.5	1.1	(268)	緑色片岩	ほぼ完存	
87	2301	R31	A	49	III	砥石	(16.8)	(16.5)	(3.9)	(800)	砂岩	—	
88	23020	R32	A	40	III	砥石	11.4	8.1	3.3	495	砂岩	完存	
89	2805		A	62	砂層一括	大型直線刃石器	(2.8)	(7.9)	(0.4)	(12.22)	結晶片岩	—	表面に光沢有り
90	2404	R21	A			打製石劍	(11.7)	(4.7)	(1.6)	(102.8)	サヌカイト	—	
91	2501	R23	A			敲石	9.4	6.6	4.2	305		—	両刃石斧を再利用
92	2802		A	22		両刃石斧	(9.6)	(5.5)	(2.5)	(146.5)	ハイアカシタイト	—	
93	2807		A	65	包	両刃石斧	(12.0)	(5.0)	(1.8)	(170.99)		—	
94	2702	R25	A			扁平片刃石斧	4.5	3.2	0.9	25.12	ハイアカシタイト	ほぼ完存	
95	2901		A	12	包	大型直線刃石器	(17.8)	(17.5)	(1.0)	(338)	緑色片岩	—	
96	2602	R29	A	50		大型直線刃石器	4.6	4.4	0.7	13.53	緑色片岩	—	再利用
97	2801		A	22		砥石	(5.9)	(2.3)	(2.3)	(26.93)	砂岩	—	
98	2803		A	試掘		刃器	6.3	3.6	0.7	16.49	サヌカイト	完存	
99	2804		A	試掘		剥片	6.7	2.6	0.7	9.72	サヌカイト	—	
100	2806		A	試掘		石材	7.85	4.3	2.2	123.79	砂岩	—	

第3表 出土石製品観察表

報告番号	実測番号	旧実測番号	調査区	グリッド	遺構・層位等	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	残存度	備考
101	2902	15				鉄刀	(4.0)	(3.4)	(1.05)	(23.14)	細片	直刀刀身部を切断 外面は木質に覆われている

第4表 出土鉄器観察表

4 出土遺物

報告は遺物ラベルに記載されていた記録を元に、素材ごとに出土した遺構や層位の単位で行い、個々の遺物の詳細は観察表（第1～4表）に示した。

なお、包含層・砂層という記載の一群が存在しており、これらについては断面図の記載と直接対応させることはできない。しかし、遺物を含む層位がⅢ・Ⅳ層であり、そのうちのⅣ-A層の粒径が砂である点および「IV B」の記載がみられる一群が確認できたことから、包含層として取り上げられた一群がⅢ層、砂層がⅣ-A層に対応する可能性が高い。このために、取り上げ時の一括性を重視し調査時の名称で掲載することにした。

なお、木器・石器については詳細な時期が不確定である。しかし、大半の出土土器が弥生時代前期から中期に相当することから、基本的には土器と同時期の遺物と考えられる。

SK出土土器（1～3） 弥生時代壺（1）の口縁部

は上下に押圧が刻まれる。頸部と体部には条痕文が施される。弥生土器甕蓋（2）の内面端部には、煤が付着する。弥生土器甕（3）の底部には焼成後に穿孔されている。時期的には、1が弥生時代中期前葉に、2・3が弥生時代前期後半に相当する。

SZ出土土器（4・5） 弥生土器壺（4）は、口縁端部外面に波状文が刻まれている。頸部には条痕文が施されており、その後、頸部下方から体部に向かってハケメが施されている。弥生土器高杯（5）は杯部が大きく開口し、口縁端部に面をもつ。脚部には、櫛描直線文が施文されており、円形の透かし孔が穿たれている。時期的には、4が弥生時代中期前葉に相当し、5が欠山式に相当する。

A22Pit出土土器（6） 弥生土器甕（6）は、口縁端部に刻目が施された弥生時代中期前葉から中葉に相当する甕である。

IV-B層出土遺物（7～10） 7～9は弥生土器壺である。時期的には、7～9が弥生時代前期後半か

ら前期末に相当する。7は、ハケメ調整後にランダムなヘラミガキで仕上げられている。頸部には、ヘラ描き沈線文が巡らされている。8も、体部外面はハケメ調整後にランダムなヘラミガキで仕上げられている。9は、ヘラミガキが丁寧に施された精製の小型壺である。10は土師質の土錐である。

IV層出土遺物 (11～15) 11～15は土師質の土錐である。

III層出土土器 (16～18) 弥生土器壺 (16) は、体部が穿孔されている。弥生土器高杯 (17) は、短脚で、脚裾端部に面をもつ。弥生土器鉢 (18) は、口縁端部が内傾して丸く収められており、体部外面はハケメで仕上げられている。時期的には、16・17が弥生時代中期後葉に、18が弥生時代後期前半に相当する。

砂層出土遺物 (19～35) 19・20・29～34は弥生土器甕、21は弥生土器鉢、22～25は弥生土器壺、26は台付無頸壺あるいは台付鉢、27・28は高杯、35は土師質土製品である。時期的には、19～22が弥生時代前期後半から中期前葉にかけて、23～34が弥生時代中期後葉に相当する。

19・20は口縁端部外面に刻目を施し、頸部直下にヘラ描き沈線文が施文されている。21は口縁端部に面を持ち、端面下方には刻目が刻まれている。22は口縁端部に沈線が施文され、端面上部にのみ刻目が刻まれている。23は頸部から大きく開口する口縁部は頸部には沈線文が巡らされている。24は櫛描直線文・波状文が施文された上に、櫛描直線文が山形に施文されている。また、貼付突帶の上に刻目が施文されている。25は頸部直下に2個1対の孔が開けられている。26は脚部に大きな透孔が開けられており、3方向分が残存している。脚裾端部には凹線文が巡らされている。29～33は口縁端部に面をもち、外面とともにハケメ調整で仕上げられている。

包含層・砂層出土土器 (36～49) 36・38～43は弥生土器壺、37・44～46は弥生土器甕、47～49は弥生土器高杯である。時期的には、36・37が弥生時代前期、38・39・44が弥生時代中期前葉、40～43・45～49が弥生時代中期後葉に相当する。

36の頸部は削り出された後に、ヘラ描き沈線文が施文されている。37は口縁部が肥厚し、口縁端部には押圧が刻まれている。頸部直下には、半裁竹

管文により直線文と連弧文が施文されている。38は口縁端部に面を持ち、波状文が施文されている。また、口縁の上下端部には押圧が加えられる。頸部には、条痕文が施文されている。39は口縁端部に面を持ち押圧が刻まれている。頸部には条痕文が施文されている。40・41は受口状口縁をなし、外面には押圧が刻まれている。頸部には沈線文が巡らされている。42は口縁端部に面をもち、押圧が刻まれている。また、口縁部上面には円形浮文が2カ所ずつ2方向に残存しており、円形浮文の上には竹管文が施文されている。43は竹管文2カ所とその下部には簾状文が施文されている。44～46は口縁部外面に刻目が刻まれている。体部は外面とともにハケメで仕上げられている。47は口縁端部が肥厚し、上部に面をもつ。杯部外面には、櫛描簾状文と櫛描波状文が施文されている。48・49はハケメ調整で仕上げられている。48は口縁部に煤が付着している。この点は、倒立させて蓋状に利用されたと考えられる。

包含層等出土遺物 (50～69) 50・51は弥生土器壺蓋、52～54・58～61は弥生土器壺、55～57・62～65は弥生土器甕、66～67は弥生土器高杯、68は土師質土製品、69は中世前期の山茶碗である。時期的には、50～57が弥生時代前期、58・59が弥生時代中期前葉、60～63・66・67は弥生時代中期後葉、64・65は弥生時代後期、69が中世前期である。

50は、摘部のくびれ部にヘラ描き沈線文が施文されている。51は内外面がヘラミガキで仕上げられている。口縁部に近接して、小さな孔が焼成前に穿孔されている。52は頸部に突帶を巡らせ、その上に刻目が刻まれている。また、頸部突帶の下方にはヘラ描き沈線文が施文されている。54は逆U字形の浮文が付加され、その上部に半裁竹管文が施文されている。55は口縁部が肥厚し、端部には押圧が施文されている。また、頸部直下には半裁竹管文が施文されている。56・57の内面には炭化物が付着している。

58・59は口縁端部に面をもち、頸部には条痕文が施文されている。58は口縁部の上下に押圧を加え、波状を呈している。また、口縁部内面には、波状文と直線文が施文されている。60は受口状の口縁部を呈し、口縁部外面には凹線文と刻目が施文されている。刻目は1方向のみに限られている。61は内傾し

た受口状の口縁部をなす。62は受口状の口縁部をなし、外面に櫛描刺突文が施文されている。体部外面は、ハケメ調整後、頸部直下から櫛描直線文・刺突文・波状文が施文されている。体部内面は弱いヘラケズリで仕上げられている。66・67は杯部内外面と脚部外面がヘラミガキで仕上げられている。杯部内面のヘラミガキには単位がみられ、66は横位4方向にきれいに単位が揃っている。68は二次焼成によって赤く変色している。

範囲確認出土土器 (70・71) 70は弥生土器甕の脚台部であり、外面はタタキで仕上げられている。時期的には、弥生時代後期から欠山式に相当する。71は中世前期の山茶椀である。

S K 6 出土木器 (72・73)⁽⁴⁾ 72・73は一木鋤の未製品であり、半裁材を削りだして整形している段階のものである。いずれも樹種は、肉眼観察の結果、広葉樹と推定される。

IV層出土石器 (74～79) 打製石鎌 (74) は基部が欠損している。石材はサヌカイトである。75は両刃石斧であり、欠損している。石材はハイアロクラスタイルの可能性がある。扁平片刃石斧(76)は、側面が打ち欠かれている点から再利用されている可能性がある。磨石 (77) は2面が使用されている。石材は砂岩である。砥石 (78) は1面のみ使用されており、鈍角の研ぎ痕が残る。石材は軽石である。敲石 (79) は全面に敲打痕がみられる。石材は砂岩である。

III層出土石器 (80～88) 80～82は打製石鎌である。80・81は端部が欠損しており、石材はサヌカイトである。82は未製品の可能性がある。全体に風化しており、異質である。抉入柱状片刃石斧 (83) は刃部に刃こぼれがみられる。84は扁平片刃石斧である。85はハイアロクラスタイルの石材である。86は大型直線刃石器である。石材は緑色片岩である。87・88は砥石である。石材は砂岩である。

砂層出土石器 (89) 89は大型直線刃石器での刃部であり、光沢のある付着物がみられる。石材は結晶片岩である。包含層等 (90～97) 90は打製石剣であり、欠損している。石材はサヌカイトである。両刃石斧 (91) は打ち欠かれており、刃部は丸く研がれている。また、2面に敲打痕がみられることから、敲石として再利用されたと考えられる。石材はハイアロクラスタイルである。

両刃石斧 (93)は縦に2面が欠損している。扁平片刃石斧 (94) は刃部に刃こぼれがみられる。石材はハイアロクラスタイルである。95・96は大型直線刃石器である。石材は緑色片岩である。96は側面が薄く研がれている点から、再利用された可能性がある。97は砥石である。石材は砂岩である。

範囲確認出土石器 (98～100) 98は刃器である。石材はサヌカイトである。99は剥片である。石材はサヌカイトである。100は砥石である。石材は砂岩である。

範囲確認出土鉄器 (101) 101は鉄刀であり、外面には木質が残存する。

5まとめ

A地区では、弥生時代を中心とする多量の遺物が出土した。時期的には、弥生時代前期末から中期前葉にかけての土器と弥生時代中期後葉の土器が大半を占めており、その他に有機物なども残存していた。

なかでも、土坑から出土した一木鋤は丸太材を半裁し整形している段階の未製品であり、縦割りにした板状の木製品が出土したという記録は、加工途中の未製品であるいわゆるミカン割り材と推定される。また、これらの木製品の加工工具に相当する抉入柱状片刃石斧や扁平片刃石斧も出土しており、これらの石斧類には刃こぼれがみられる。このように加工途中の木製品の出土と使用痕のある石斧類が出土していることからは、集落内で木製品の加工を行っている可能性が高いと考えられる。また石器類でも、小さな石材や小さな剥片と砥石類が出土している。

以上の点から、弥生時代の上箕田遺跡では小規模な手工業生産が行われていたと考えられる。

B地区では上箕田城に関連する遺構は未検出であり、前方後円墳を裏付ける痕跡も確認されなかった。

(川崎志乃)

〔註〕

- (1) 安田喜憲「三重県上箕田遺跡における弥生時代の自然環境の変遷と人類」『人文地理』第25巻第2号 1973年
- (2) 鈴鹿市教育委員会・上箕田遺跡調査会『上箕田 弥生式遺跡第二次調査報告』1970年
- (3) 遺物ラベルに S K 1と記載されていた遺物群については、遺構図との対応関係が把握できないため、S Kとして報告する。
- (4) 「上箕田遺跡(7次)発掘調査報告」(三重県埋蔵文化財センター 2008年刊行)所収の第5図1が本報告72と、同図2が本報告73と同一個体である。



昭和47年撮影空中写真(西から)



作業風景



木器出土状況(1)



土器出土状況



木器出土状況(2)

II 上原遺跡

1 調査の経過

上原遺跡は、津市美里町南長野字上原に所在する遺跡である。発掘調査は、昭和61年度県営圃場整備事業（美里中南部地区）に伴い1986年7月から開始し、同年8月に終了した。調査面積は排水路部分（A地区）160m²と面的調査部分（B地区）940m²合わせて1,100m²である。

2 位置と環境

上原遺跡（1）は、笠取山東斜面に水源を発する南長野川と長野川が合流する地点の右岸の右岸、標高150m前後の河岸段丘に位置する。

当遺跡の下流約1kmには、縄文時代早期前半に遡る数多くの遺構・遺物が確認された西出遺跡（2）が所在するが、その後の縄文時代から古代に至る遺跡は顕著ではなく、本格的に発展するのは中世に入ってからで、東出前遺跡（3）、白樺遺跡（4）、高添遺跡（5）、神ノ宅遺跡（6）において鎌倉時代から室町時代の遺構・遺物が確認されている。そして、

当遺跡から長野川の上流1kmには中世後期に、中勢地域を支配した長野氏の居城、国指定史跡長野城（7）が築かれている。

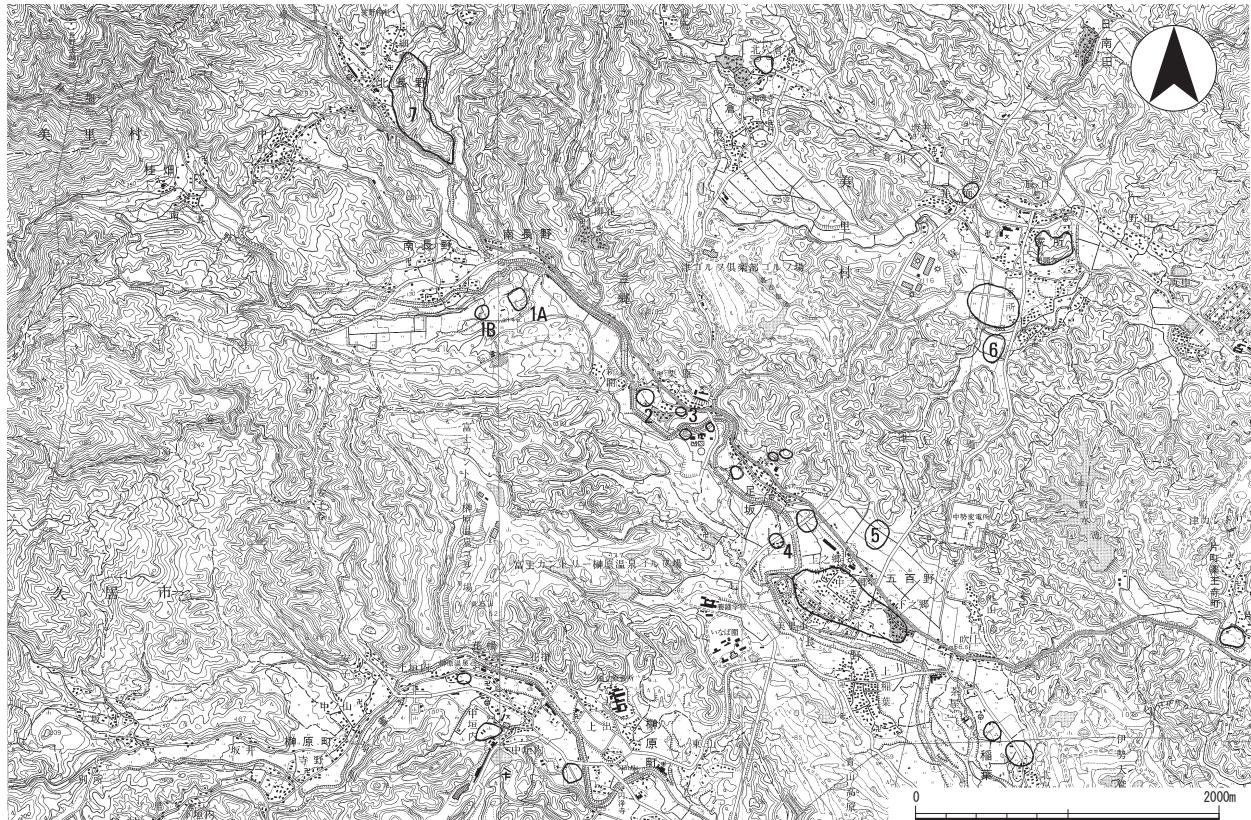
3 遺構と遺物

発掘調査の結果確認された遺構はB地区において小穴がわずかに検出されているにすぎず、排水路部分の調査を行ったA地区においては遺構が検出されなかった。遺物の出土もわずかで図示できたものは山茶碗（1・2）、天目茶碗（3）の底部のみである。山茶碗は13世紀代のものであるが、天目茶碗については詳細な時期は不明である。このほか、土師器鍋・皿などが出土している。

4 まとめ

今回の調査では顕著な遺構は確認できなかったが、鎌倉時代・室町時代の遺物が出土し、本地域における開発の展開を裏付けることとなった。

（上村安生）

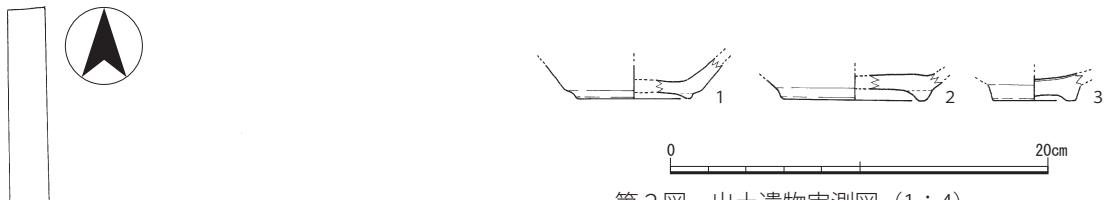


第1図 遺跡位置図(1:50,000) 国土地理院1:25,000「津西部」「佐田」より

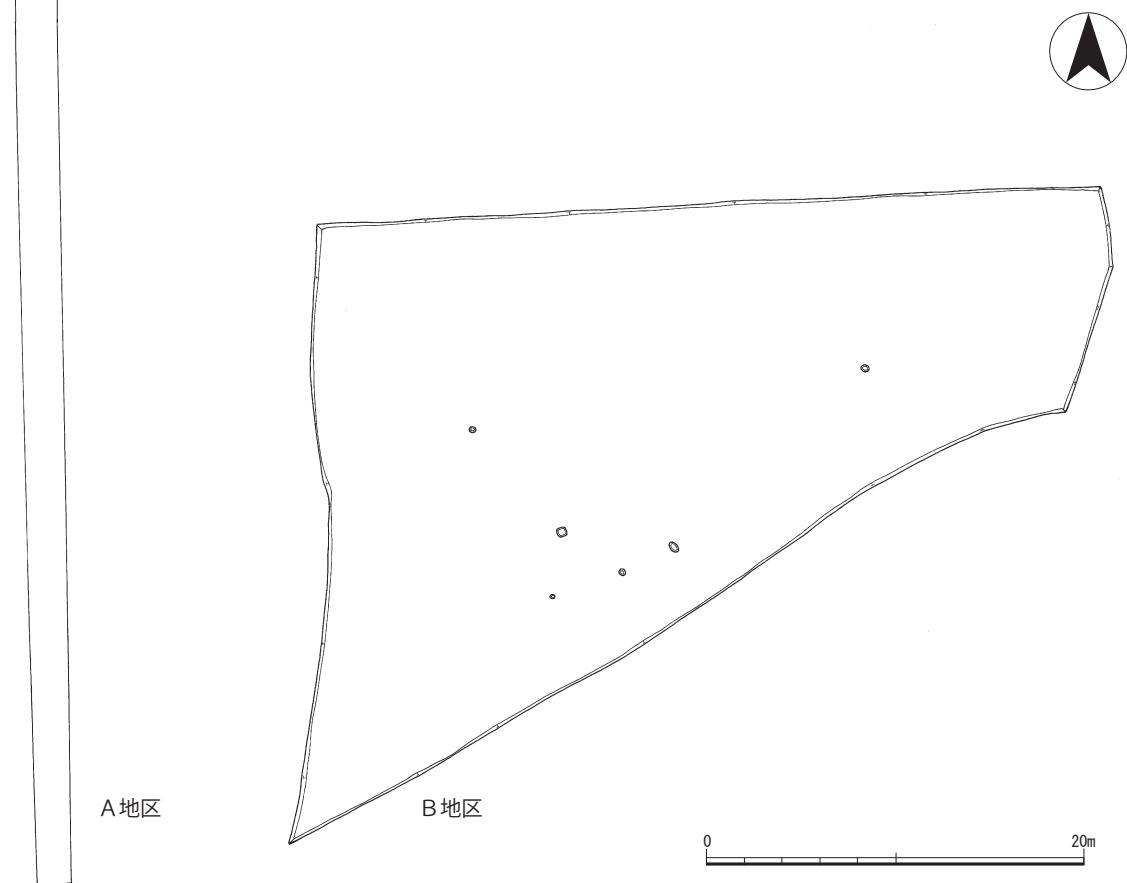
1A 上原遺跡A地区 1B 上原遺跡B地区 2 西出遺跡 3 東出前遺跡 4 白樺遺跡 5 高添遺跡 6 神ノ宅遺跡 7 国指定史跡 長野城

報告番号	実測番号	器種	出土地区出土遺構	法量(cm)	調整・技法	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	101	陶器 山茶椀	C3、4、5 包含層	底6.0	内：吻付 外：吻付、貼付高台	密	良	灰白7.5Y8/1	底1/3	B地区
2	102	陶器 山茶椀	C12、13 包含層	底7.6	内：吻付 外：吻付、貼付高台	密	良	灰白5Y8/1	底1/3	B地区
3	103	陶器 天目茶椀	C3、4、5 包含層	底4.4	内外：吻付、施釉	密	良	素地：灰白2.5Y8/2 釉：暗褐10YR3/4 黒10YR2/1	底部完存	B地区

第1表 出土遺物観察表



第2図 出土遺物実測図 (1:4)



第3図 A地区・B地区遺構平面図 (1:400)

III 尾野山城跡

はじめに

尾野山城跡は、桑名市街地の西北の丘陵上に所在する中世城跡で、行政上は桑名市東方字岸西である。この丘陵の北端で都市計画街路桑名員弁線道路改良事業により、都市計画道路が計画され丘陵斜面から裾部にかけての範囲が事業対象地となった。事業に先立ち、三重県埋蔵文化財センターは県土木部都市計画課と協議を行い、平成4年度に尾野山城跡の地形測量を実施し平面図を作成し、平成6年度に試掘調査を実施した。

(泉 雄二)

1 周辺の中世城跡

桑名市内には、現在30箇所の中世城館が確認されている。以下、尾野山城跡周辺の中世城館を列挙しておきたい。⁽¹⁾ なお、遺跡番号は桑名市の遺跡番号に準拠している。

尾野山城跡（48）は南北に細長い丘陵の北端にあ

る。この丘陵上には、尾野山城跡に南接して白山ヶ鼻城（49）があるが、すでに造成されており現在は大成小学校となっている。さらに南約300mには尾畠城跡（54）がある。尾畠城跡から南1kmの所には愛宕山城跡（98）と矢田城跡（96）が隣接してある。この両城の西方にある現桑名市街地の西方の丘陵部には1km程の間隔で、中世城館が2～3城ずつまとまって所在している。東から順に西方城跡（85）、白山城跡（90）、西別所城跡（92）の3城、蓮花寺東城跡（77）、蓮花寺西城跡（79）の2城、額田城跡（71）、高塚の墟城跡（70）の2城、そして星川城（62）である。また、南に員弁川を渡った右岸には、上流から、志知城跡、島田城跡（108）、桑部城跡（122）、金井城跡（125）が点在している。一方、桑名市の平野部は、すでに市街地が進んでいるが赤須賀城跡（104）、安永城跡（134）、江場城跡（127）がある。



第1図 遺跡位置図 (1:50,000) (国土地理院 1:25,000 「桑名」より)

2 文献と現状

尾野山城跡の範囲は東西最大100m、南北130mで、比高差は19mである。遺跡名は尾野山砦跡、小野砦跡とも称されている。

尾野山城跡は『勢陽五鈴遺響』に小野砦跡として「尾野山正斎房ト称ス凶惡ノ僧当社ノ別当ナリシカ此所ニ城砦ヲ築キ桑名近郷ヲ領ス永禄天正ノ間織田信長ノ為ニ廢城セリ又永禄年中建部掃部介東方ニ住セリ城砦ノ遺跡アリ東方殿ト称セシナリ 郡賦ニ渡部ニ作ル」と記載されている。

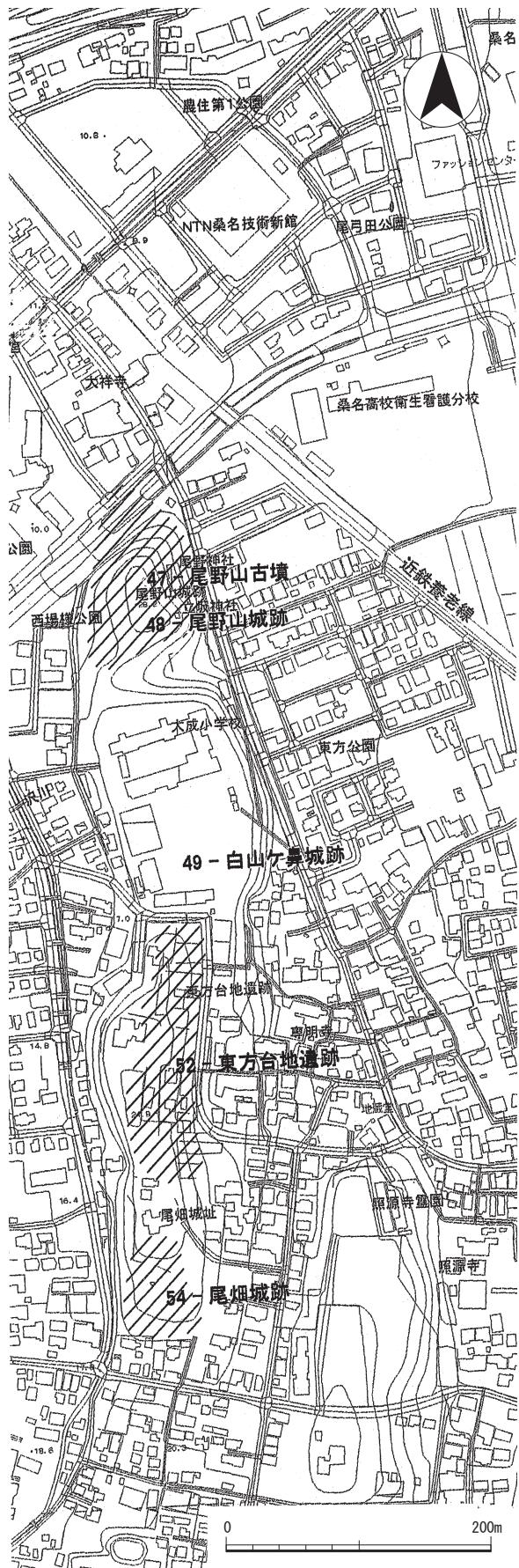
尾野山城跡が遺跡として埋蔵文化財包蔵地カードに記載されたのは、1970（昭和45）年2月15日で、尾野山砦跡として「東方の俗称船着にある。方二十間ばかり、墳墓の跡があり、現在は松林になっている。その下に尾野神社がある。」と概要が記載されている。

また『三重の中世城館』には、『勢陽五鈴遺響』の記載を紹介したうえで、「現在は尾野神社の裏山になり、土壘が部分的に残存し、壇もみられる。標高25.9mである。」としている。また、これ以外にも『定本・三重の城』にも概略が記載されている。なお、尾野山城跡内には尾野古墳（47）があるとされており、また尾野山城跡の包蔵地カードには「この丘陵一帯には須恵器が多数出土する。すぐ南隣の大成小学校校庭からも古墳時代塚が出土している。従って古墳と砦と重なっている可能性もある」としている。白山ヶ鼻城と尾畠城跡の間には弥生土器が散布する東方台地遺跡（52）もあり、この丘陵上は弥生時代から古墳時代にかけての遺跡でもあると考えられている。

3 地形測量

調査前の地形測量は、遺跡全体を対象として、平成4年6月に実施した。原図の縮尺は1/100で、コンターは20cm間隔である。ただし、本報告の縮尺は1/500である。

山頂部は標高23～25mで、南北約40m、東西約15mの平坦地となっている。山頂部平坦地の南端は若干高くなっている。平坦地の東側は後世の神社境内の造成時に削り取られた可能性があり、旧地形はもう少し東西幅があったと思われる。山腹東側の標高12～13m付近には、南北約50m、東西15m



第2図 遺跡地形図 (1:5,000)

の平坦地があり尾野神社の境内となっている。平坦部は神社境内の北奥端部から山腹の北側テラスに続き、さらに幅4m程の道となって、西側へと回り込み、山腹を「コ」の字状に囲む。なお、城の南側は谷地形となっている。

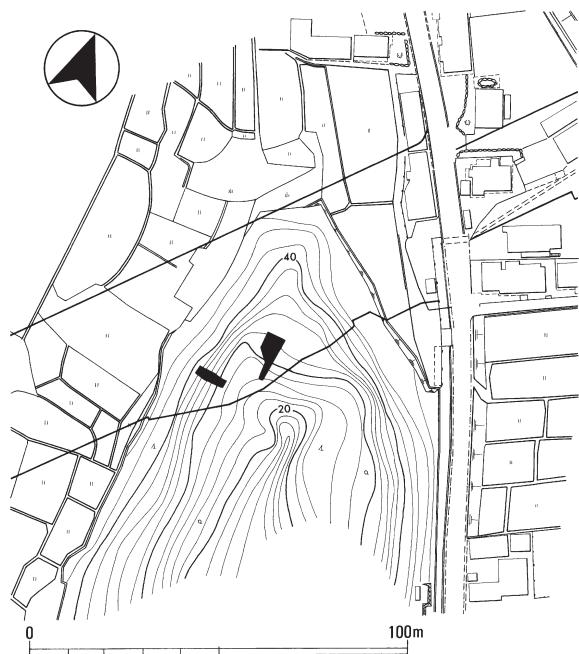
(河北秀実)

4 試掘調査

試掘調査は平成6年10月5日に実施した。丘陵斜面には曲輪状のものが巡っているため丘陵斜面に直交する位置に2箇所試掘坑を設定した。調査面積は132m²である。

北側試掘坑では、約1m盛土を行っており、その下に旧表土が確認できた。曲輪状のものは盛土の上面にあり、盛土中には近現代の瓦片が認められることから近年の造成に伴う道路の可能性が強いことが判明した。また、拡張して盛土・旧表土を除去し旧地形を確認した結果、試掘坑の北に延びる尾根は旧地形を残すものであり、また北側の試掘坑部分はテラス状にカットした後に大規模に盛土したことが確認できた。テラス部分での遺構はなく、遺物も旧表土以下からは出土していないためカットした時期については不明であるが、北側に向かって緩く傾斜していることから、城に伴う造成の可能性は低いと思われる。西側試掘坑では、遺構・遺物は確認できなかった。

(泉 雄二)



第3図 調査区位置図 (1:2,000)

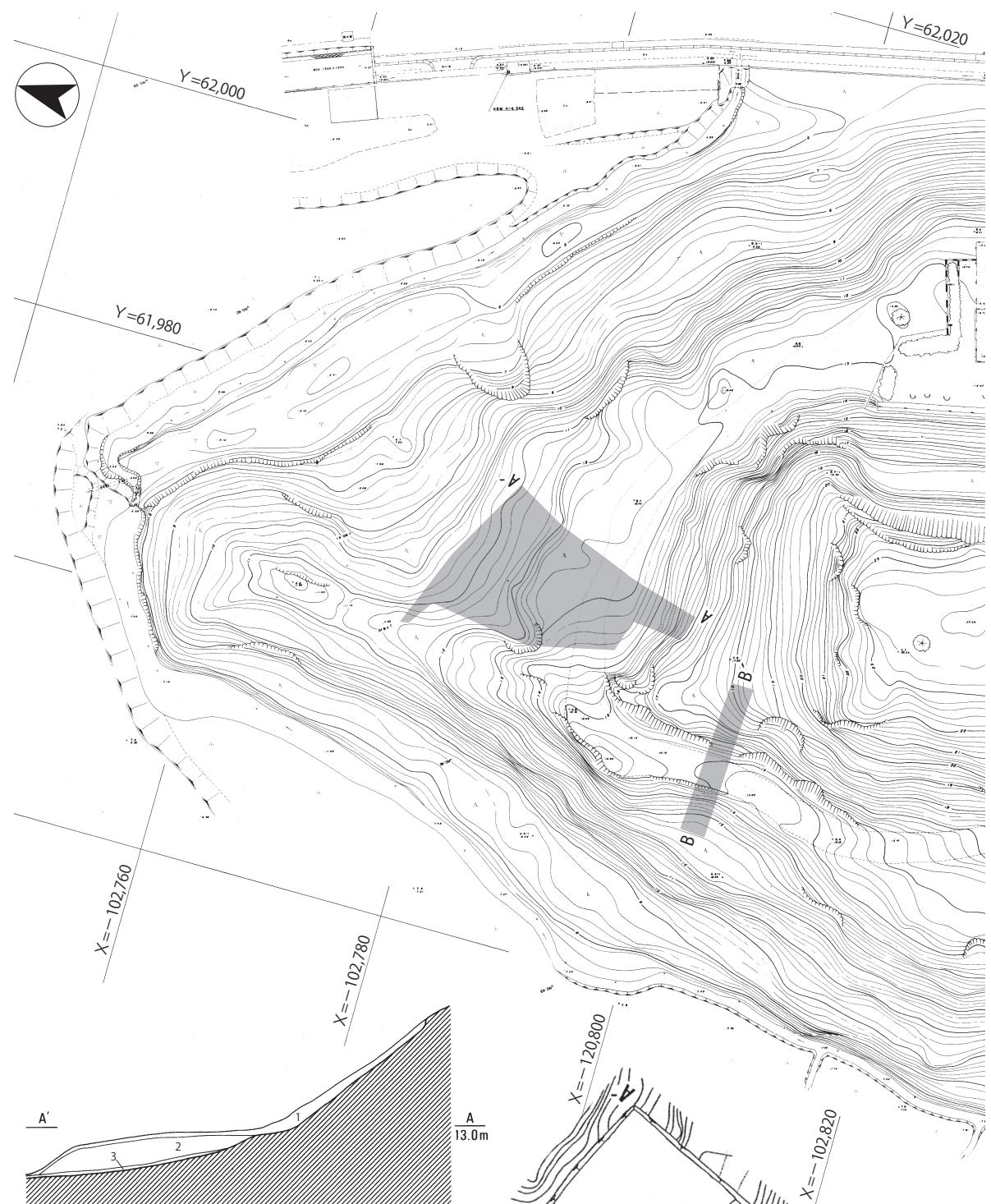
おわりに

試掘調査結果からは、尾野山城跡に直接関係する遺構・遺物は確認できなかった。しかし発掘調査に先立ち、城跡全域の地形測量を実施したことは一つの大きな成果である。

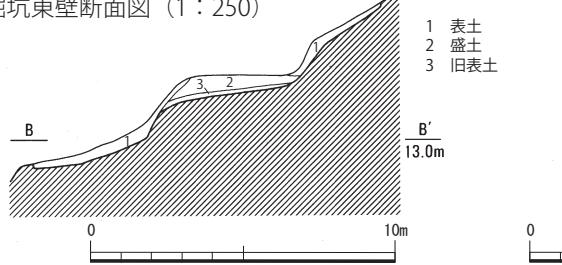
(河北秀実)

[註]

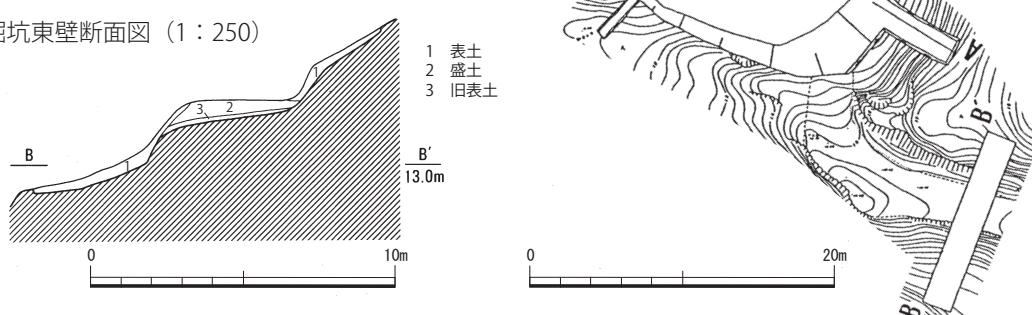
- (1) a. 三重県教育委員会『三重の中世城館 一開発集中地域中世城館分布調査報告』 1976
- b. 桑名市教育委員会『桑名市遺跡分布地図』 1995
- (2) 桑名市教育委員会『愛宕山城跡発掘調査報告書』 2006
- (3) 伊藤徳也「複合資料による中世城郭の復元的予察 (6) 7. 西別所城の検討」『伊勢の中世』第115号 伊勢中世史研究会 2005
- (4) 伊藤徳也「複合資料による中世城郭の復元的予察 (5) 6. 島田城の検討」『伊勢の中世』第114号 伊勢中世史研究会 2005
- (5) a. 桑名市教育委員会『桑部城跡第1次発掘調査概要報告書』 1996
- b. 桑名市教育委員会『桑部城跡』『桑名市文化財調査報告書 I 平成3年～7年』 1996
- c. 桑名市教育委員会『桑部城跡(第1次)』『桑名市文化財調査報告書 平成8年』 1997
- d. 桑名市教育委員会『桑部城跡(第2次)』『桑名市文化財調査報告書 平成8年』 1997
- e. 桑名市教育委員会『桑部城跡第2次発掘調査報告書』 1997
- f. 桑名市教育委員会『桑部城跡(第3次)』『桑名市文化財調査報告書 平成8年』 1997
- g. 桑名市教育委員会『桑部城跡第4次発掘調査報告書』 1998
- h. 桑名市教育委員会『桑部城跡第6次発掘調査報告書』 1999
- (6) 桑名市教育委員会『安永城跡』『桑名市文化財調査報告書 I 平成3年～7年』 1996
- (7) 安岡親毅『勢陽五鈴遺響』(倉田正邦『勢陽五鈴遺(1) 三重県郷土資料叢書第25集』 三重県郷土資料刊行会)
- (8) [註] (1) aに同じ
- (9) 樋田清砂 監修『定本・三重県の城』株式会社郷土出版社 1991



第4図 北試掘坑東壁断面図 (1:250)



第5図 西試掘坑北壁断面図 (1:250)



第6図 調査区平面図 (1:500)



第7図 調査前地形測量図 (1:500)

IV 打越城

1 前言

(1) 打越城の遺跡登録と発掘調査まで

打越城は、昭和51年に中世城館として遺跡登録されたが、同年に刊行された『三重の中世城館』によると、別名「奥出の城」ともよばれ、規模は30×80mで、「堀切りで南と北の台状地にわけられ、堀切りの中央には、井戸状のものが2か所ある。現在の県道をへだてた東方の山に標的をもうけて矢を打越したので『打越城』の名があるという」としている。調査区位置図で示した縄張り図は、同書に記されたものを地形に合わせて貼り込んだものである。また、『南勢町誌』⁽²⁾には、「長さ12メートル余りにわたる空濠が二条残る。城主を南部修理大夫とする伝承があり、この山城の南下にある数基の五輪塔はその墓と伝えられる」としている。さらに『定本・三重の城』⁽³⁾では、「二条の堀切に要害されたふたつの平坦郭が残る。城主は不明。」としている。

(2) 発掘調査

打越城の発掘調査は、平成4年度県道伊勢路伊勢線道路改良事業によって消失する南側の平坦地と北側の平坦地の一部、そしてその間にある堀切を中心に行い、記録保存をはかった。

現地での発掘調査は、平成4年11月2日から開始し、12月10日に終了した。調査面積は約500m²である。調査は、現地形を測量した後、トレーニングを設定して、土層の確認を行い、南側の平坦部から北に向かって発掘調査を進めた。東側斜面は急峻で作業の安全が確保できなかったため堀切付近のみ掘削作業をおこなった。

(高崎 仁)

2 位置と環境

(1) 位置

現在の南伊勢町は平成17年に南勢町と南島町が合併したものである。旧南勢町は、志摩半島の熊野灘側に面し、典型的なリアス式海岸の五ヶ所湾を中心とする地域である。東西北は標高300m程の剣峰、切原峰、鍛冶屋峰、牛草山などの山々に囲まれている。平野は少なく、五ヶ所川流域と伊勢路川流域にわずかに開析された平野部がみられる。

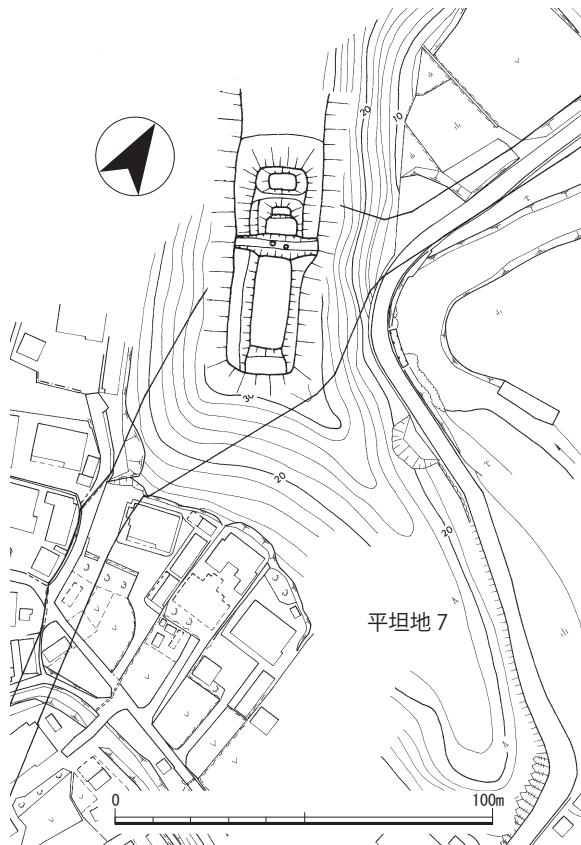
打越城（1）は、五ヶ所湾の最も奥まった所にある内瀬の集落から、伊勢路川を約2km遡った伊勢路字奥出の集落の背後に位置する低丘陵の狭い尾根上に築かれていて、現況は山林となっている。

(2) 旧南勢町の遺跡

旧南勢町における発掘調査例は少ないが、先土器～縄文時代の石器が出土した切原のナゴサ遺跡⁽²⁾、五ヶ所浦のヒロサキ遺跡⁽³⁾、弥生～中世の遺物が出土した迫間浦の道瀬遺跡⁽⁴⁾、礫浦の宮山古墳⁽⁵⁾、中世～近世の塚である五ヶ所浦の万度盛塚⁽⁶⁾があげられる。

旧南勢町内には、狼煙場や消滅したものも含め、15箇所の中世城館が知られ、そのほとんどが丘陵や尾根上に築かれている。

田曾浦の田曾城⁽⁷⁾は、昭和60年度に発掘調査され、出土遺物などから15世紀前半に築城され、少なくとも16世紀中頃まで存続したことや、15世紀後半に一度焼失し、比較的早く再建されたとされている。また、五ヶ所浦の五ヶ所城⁽⁸⁾と愛洲氏館⁽⁹⁾



第1図 調査区位置図 (1:2,000)

は『南勢町誌』によれば「愛洲氏の活躍は種々の文献に散見されるが、一貫した動静に乏しいし、それぞれの本拠も確定し難く」としながらも、「本町に愛洲一族のあったろうことは否定されまい」として、愛洲氏の城であるとしている。そのほか迫間城(10)、西行谷城(11)、押淵城(12)、伊勢路城(13)、城屋敷館(14)、船越城(15)、中尾のろし場(16)、馬山城(17)、飯満城(18)、花岡城(19)、加津良島館(20)が知られる。打越城が所在する伊勢路は、法楽寺文書紛失記所収の正平7(1352)年頃と推定される法楽寺末寺廿四ヶ寺目録に「鹿園寺伊勢路十六人、上野覆盆子十二人御恩」とあり、文献上は14世紀まで遡ることができる。

(高崎 仁)

3 遺構

(1) 概要

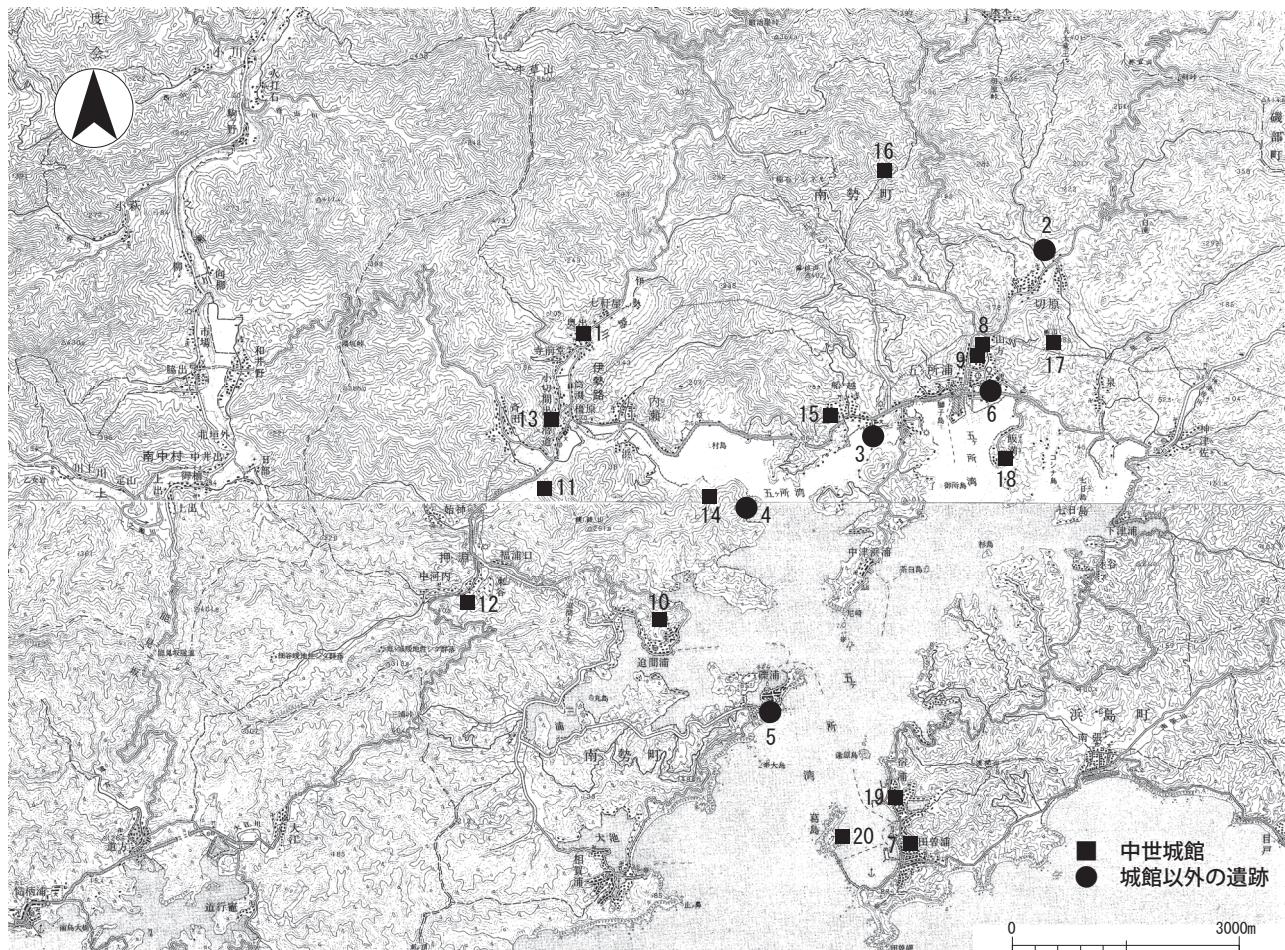
調査前の現況は、前述した『三重の中世城館』の記述にほぼ一致する。遺構は堀切1を境に南側と北側に分かれる。南側には、平坦地1・2、通路1が

ある。北側には平坦地3~6、土壙1、堀切2・3がある。このうち発掘調査を実施したのは、南側すべてと堀切1、北側の平坦地3と土壙1である。なお、『南勢町誌』で「山城の南下」とされている場所も城の範囲と考えられるので、平坦地7として現地確認を行った。以下に各遺構の状況を記述するが、規模や標高は、発掘調査をした遺構については掘り上がりの数値を、また事業地外のため発掘はせずに地形測量のみを行った遺構については現況の数値を記述する。

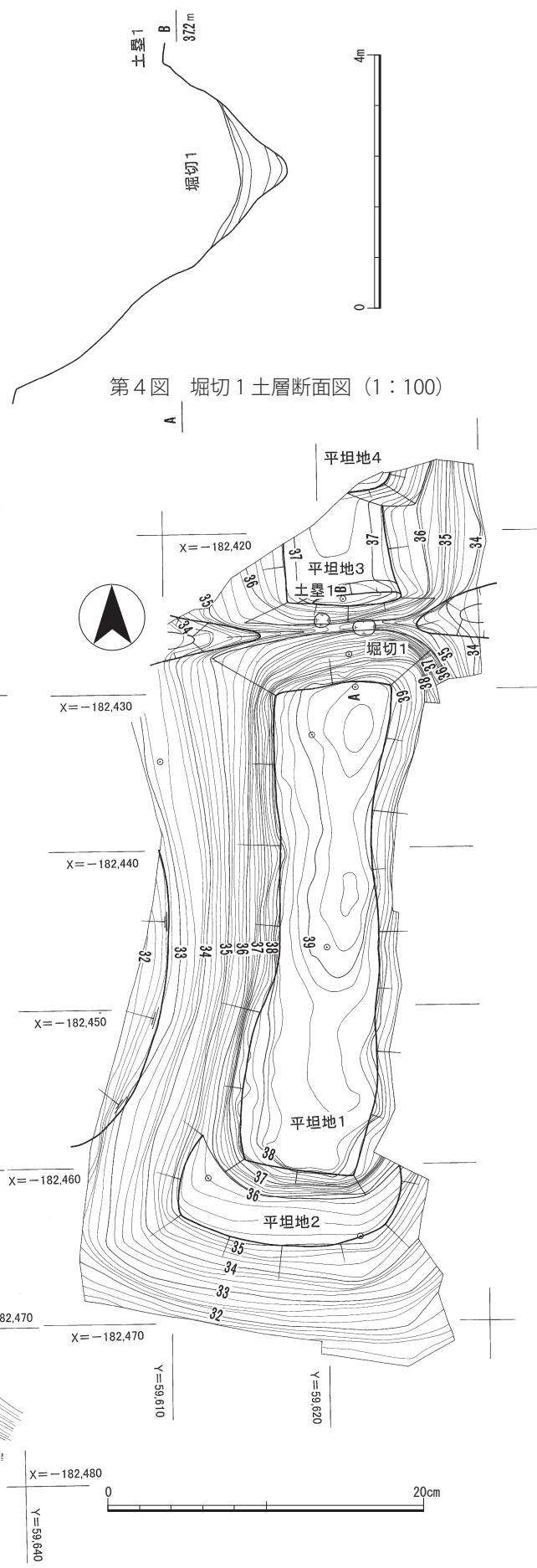
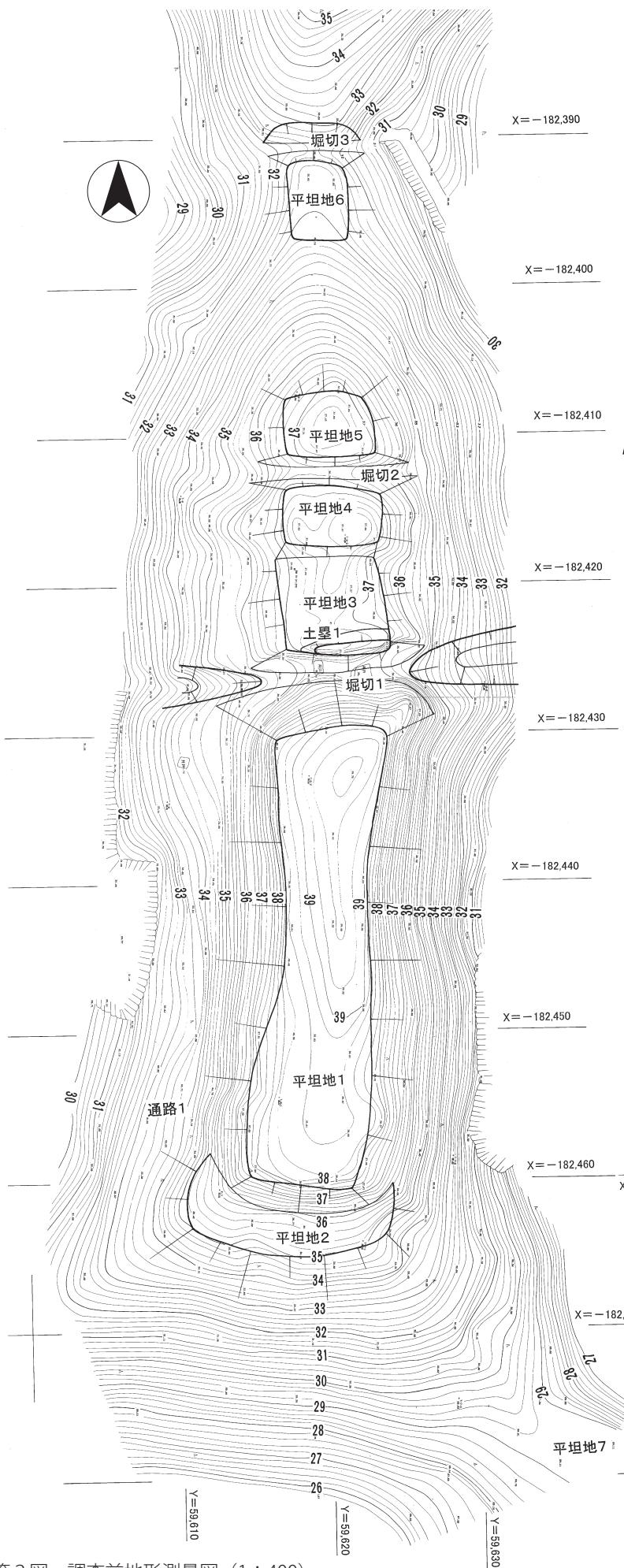
(2) 発掘調査をした遺構

平坦地1 発掘調査区の中では最も大きい平坦地で、東西30m×南北6m、標高は38~39.6mで、北から南へ向かって緩やかに傾斜する。土坑やピットは確認されなかった。北側は堀切1を構成する斜面になっており、東西南側は急峻な斜面となっている。

平坦地2 平坦地1の南斜面下に位置し、東西11m×南北3mの三日月形をした平坦地で、標高は35~36mである。



第2図 遺跡位置図 (1:100,000) (国土地理院 1:50,000 「伊勢」「賀浦」より)



遺構名	規模(m)	標高(m)	調査方法
平坦地1	30×6	38.0～39.6	発掘調査
平坦地2	11×3	35.6～36.0	発掘調査
平坦地3	7×7	37.2	発掘調査
通路1	長さ約40	35～36	発掘調査
堀切1	12×5	36.3～39.0	発掘調査
土壘1	7×2	37.5	発掘調査
平坦地4	4×7	38	地形測量
平坦地5	4×5	37.5	地形測量
平坦地6	5×5	33	地形測量
堀切2	5×5	36.7～37.2	地形測量
堀切3	5×2	32.4～33.0	地形測量
平坦地7	100×30	20～24	現地確認
墓1	2.5×1.5	22前後	現地確認

第1表 遺構一覧表

番号	整理番号	出土位置	器種
1	003-07	西斜面	土師器鍋
2	001-01	排土	山茶椀
3	005-01	西斜面	陶器天目茶碗
4	005-02	西斜面	陶器平椀
5	005-03	西斜面	陶器鉢
6	003-03	東斜面	陶器鉢
7	004-01	西斜面	陶器鉢
8	005-05	東斜面	陶器鉢
9	003-13	西斜面	陶器壺
10	003-06	西斜面	陶器壺
11	003-01	西斜面	陶器壺
12	006-04	西斜面	陶器壺
13	007-02	西斜面	陶器甕
14	010-01・02	南テラス・東斜面	陶器甕
15	007-01	西斜面	陶器甕
16	008-02	西斜面	陶器甕
17	003-11	西斜面	陶器甕
18	005-04	西斜面	陶器甕
19	005-06	西斜面	陶器甕
20	002-01	東斜面	陶器甕
21	003-10	西斜面	陶器甕
22	008-03	西斜面	陶器甕
23	006-05	西斜面	陶器甕
24	008-01	西斜面	陶器甕
25	---	テラス	陶器甕
26	---	西斜面	陶器甕
27	011-01	西斜面	陶器甕
28	006-06	東斜面	陶器甕
29	006-02	南斜面	陶器甕
30	003-05	西斜面	陶器甕
31	003-08	南斜面	陶器甕
32	003-02	西斜面	陶器甕
33	006-01	西斜面	陶器甕
34	003-09	東斜面	陶器甕
35	003-12	西斜面	陶器甕
36	003-04	西斜面	陶器甕
37	002-02	西斜面	陶器甕
38	008-04	西斜面	陶器甕
39	009-01	東斜面	陶器皿
40	006-03	南斜面	陶器燭燭立
41	012-01	上テラス	鉄鍋

第2表 遺物一覧表

平坦地3 北西隅を少し残して発掘調査を行った。

東西7m×南北7m程で、標高は37.2m程である。

通路1 平坦地1の西斜面下の標高33～34m付近は長さ40mにわたって、傾斜が緩くなつており、通路の可能性がある。しかし、明確な遺構としては、確認できなかつた。

堀切1 平坦地1と3の間にある堀切で、長さ12m、幅5mである。比高差は南側が4m、北側が2mである。現地表面から0.7m程埋没しており、埋土は第1層腐植土、第2層暗黄褐色土、第3層黄褐色土、第4層黄褐色土に礫混じり、第5層褐色砂礫である。堀切の中にある2基の井戸状の遺構とされていたものについては、城存続期のものが埋没せずに残つてゐるとは考えがたく、また地元での聞き取りでは現代のイノシシ用の落とし穴との見解もあり、時期的には新しいものと判断した。

土壘1 平坦地3の南端に位置する。かなり流失しているが、長さ7m、幅2mの範囲で高さ0.3m程の高まりが見られた。

(3) 地形測量を行つた遺構

地形測量のみを行つた遺構は、調査区外北側の平坦地4～6、堀切2・3である。堀切3は奥部との遮断施設としての機能を持つた堀切である。

(4) 現地確認を行つた遺構

平坦地7 調査区の南端からさらに南側に細長く突き出た尾根上に位置する平坦地で、一段低くなつており標高は20～24mである。地形測量を実施していないため、詳細を把握することができなかつたが、現地確認と地形図から判断すれば、南北100m×東西30m程度と推定される。完全に平坦ではなく、北から南にかけて緩やかに下つてゐる。

墓1 『南勢町誌』に記述されている墓で、平坦地7のほぼ中央に位置する。規模は南北2.5m×東西1.5m程の方形で、人頭大の石により区画される。西向き、すなわち現集落を正面とする。墓の築造年代は不明であるが、中世の五輪塔が9基程据えられ、現在も信仰の対象となつてゐる。 (高崎 仁・河北秀実)

4 遺物

出土遺物は全部で整理箱に5箱程である。遺物は平坦地1とその斜面から出土したが、ほとんどが西

斜面からの出土である。中世のものには、土師器鍋(1)、陶器山茶椀(2)・椀(3・4)・鉢(5~8)・三筋壺片・壺(9~11)・甕(12~38)、鉄鍋(41)などがある。近世のものには、陶器皿(39)・蠟燭立(40)がある。

山茶椀(2) 廃土中より出土した底部の破片である。藤澤編年の5型式(12世紀後葉~13世紀初頭)⁽¹²⁾で、渥美産であろう。

陶器椀(3・4) 3は天目茶椀、4は平椀で、ともに内面全面と外面体部に灰緑色の施釉がみられる。瀬戸産で、中I~II期⁽¹³⁾(14世紀初頭)のものである。

陶器鉢(5~8) 5は口縁の端面に沈線があるもの、6は口縁に平坦面をもち外側に張り出すもの、7・8は内側と外側に張り出すものである。

陶器壺(9~12) 9は高台が付くものである。11は鳶口壺で赤羽・中野編年の6a型式期(1250~1275年)⁽¹⁴⁾前後のものである。

陶器甕(13~38) 13は頸部が内傾し口縁部が外に広がり、口縁端部は外面に面をもつもので、赤羽・中野編年の3型式期(1175~1190年)である。14は、口縁が横T字状になるもので、5型式期(1220~1250年)または6a型式期(1250~1275年)である。15~22は口縁がN字状を呈するもので、6a型式期である。23・24・27は縁帶の幅が広くなつて

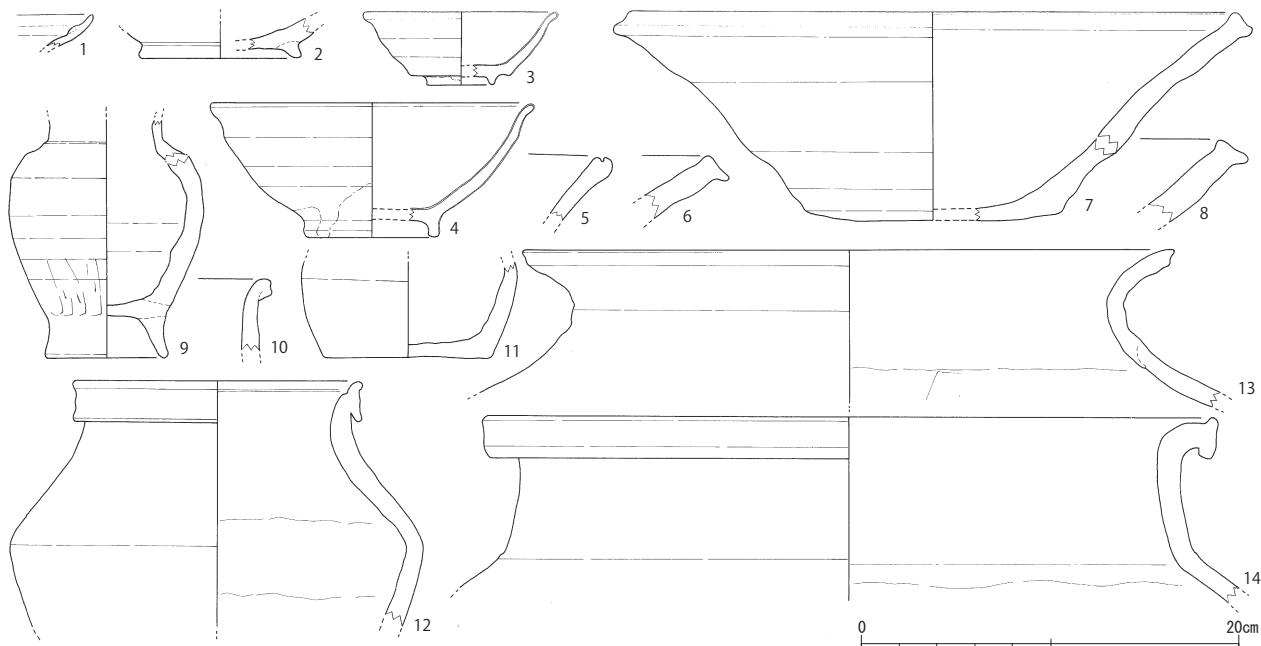
おり、6b型式期(1275~1300年)~7型式期(1300~1350年)である。28・29は、頸部と縁帶との間に隙間があり、8型式期(1350~1400年)である。30~32は、口縁の縁帶が垂下し、頸部に接合するが、隙間が残つており、9型式期(1400~1450年)である。また、押印のあるものは3点出土した。25は左右に縦3本、中央に×印であり、26は左右に縦の3本線で中央の左上から右下に向かって葉脈状の文様である。27は左右に縦3本、中央には丸に縦3本線の印である。

(高崎 仁・河北秀実)

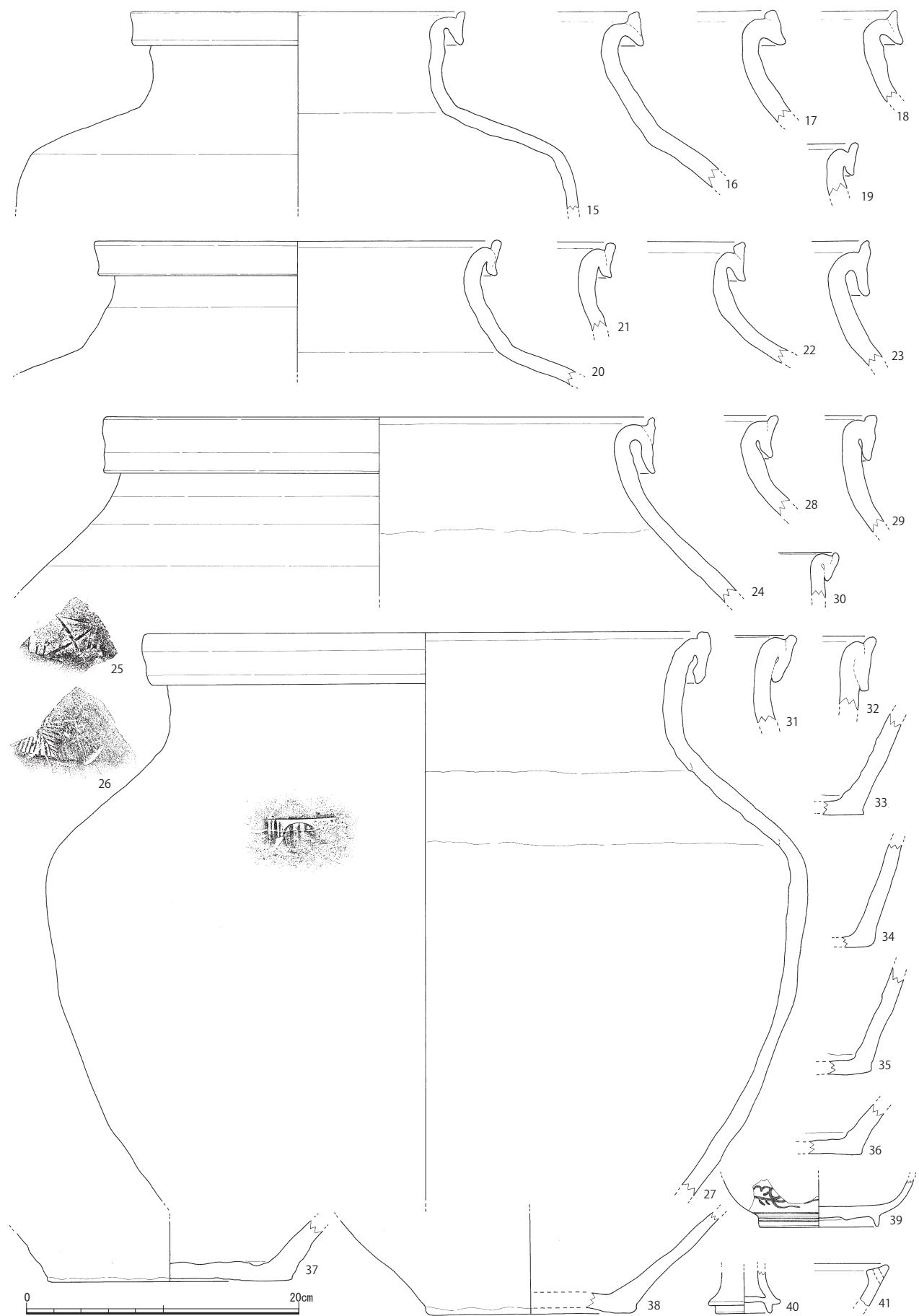
5 結語

(1) 範囲と構造

打越城は細長い尾根上の小規模な城跡で、その範囲は南北200m、東西最大幅30mである。いくつかの平坦地とそれを区画する堀切で構成され、奥部とは堀切3により遮断されている。平坦地は10mにも満たない小規模なものがほとんどで、最も大きい平坦地1でも30×6mである。いずれの平坦地からもピットや土坑などの遺構は検出されなかった。なお、発掘調査区外の平坦地7は南北100mで他の平坦地に比べて大きいが、いくつかの平坦地から成り立っている可能性もあり、今後、詳細な測量や観察が必要である。



第6図 遺物実測図(1) (1:4)



第7図 遺物実測図 (2) (1:4)

(2) 出土遺物と城の存続時期

出土遺物は12世紀代から近世までのものがみられるが、その量はあまり多くない。種類としては中世常滑産の陶器甕が比較的目立つことが特徴である。出土遺物の時期は13世紀後半から15世紀前半のものが中心であり、この時期が城として本来的に機能をしていた時期と考えられる。

(3) 村落と経済基盤

打越城の眼下には、現在は伊勢路の集落を見渡すことができる。伊勢路集落は農山村で、伊勢路川沿いの狭隘な平野部には現在も田畠が見られる。打越城の経済基盤は、前述の『法楽寺文書紛失記』にもみられる「伊勢路」であろうと考えられるが、現集落およびその周辺には、中世の遺跡は確認されていない。恐らく現集落に平面上、重複するなどして中世の集落が存在していたのであろう。当地は伊勢路川沿いに北へ遡上すれば、鍛冶屋峠を越えて一字郷すなわち現在の横輪、下村、菖蒲などの山村にも通じている。打越城は伊勢路集落の北端にあり、一字郷方面から集落を守る機能を有していたと推定される。

(4) 小規模城館の特徴

旧伊勢国南部での中世城跡の発掘調査例としては、⁽¹⁵⁾南伊勢町の田曾城跡、度会町の麻加江城、玉城町の山神城跡、⁽¹⁶⁾大台町の栗生城跡などがある。いずれも小規模であるが、調査をおこなっていないものも含めて、旧伊勢国南部には比較的普通にみられる規模である。

小規模山城については、新潟県北部等の城をモデルにした研究があり、生産基盤である山村に近隣した丘陵上にあること、全体の規模は大きくなく尾根筋だけの造形工事であること、平坦面や堀切等があること、堀切により奥部との遮断をしていること、などをその特徴としている。こうした山城の在り方は自然地形に大きく左右されるが、生産基盤や立地、構造などのいくつかの要素には、打越城の特徴と共通する部分もみられる。今後、旧伊勢国南部での中世城跡も含めて詳細な比較検討をおこなうことにより、地域特性がより明瞭になるであろう。

(高崎 仁・河北秀実)

〔註〕

- (1) 中世古祥道「打越城跡」『三重の中世城館 一開発集中地域中世城館分布調査報告一』三重県教育委員会 1976
- (2) 南勢町誌編さん委員会「第七章 室町時代 二 城塞」『南勢町誌』南勢町 1985
- (3) 樋田清砂 監修『定本・三重県の城』株式会社郷土出版社 1991
- (4) 南勢町教育委員会『ナゴサ遺跡調査事務報告』 1976
- (5) 関西大学文学部考古学研究室編集『度会郡南勢町ヒロサキ遺跡・礫浦古墳群の調査』『紀伊半島の文化史的研究一考古学編一』清文堂出版株式会社 1992
- (6) 南山大学人類学研究所編『迫間道瀬遺跡』 南勢町教育委員会 1976
- (7) 註(5)と同じ
- (8) 南勢町『万度盛塚遺跡発掘調査報告』 1977
- (9) 三重県教育委員会『田曾城跡発掘調査報告』 1986
- (10) 南勢町誌編さん委員会「第七章 室町時代 三 愛洲氏」『南勢町誌』南勢町 1985
- (11) 平松令三 監修『三重県の地名』日本歴史地名大系 第24巻 株式会社平凡社 1983
- (12) 山茶椀の編年については、主として下記の文献を参考にした
 - a. 藤澤良祐「瀬戸古窯址群 I」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』I 瀬戸市歴史民俗資料館 1982
 - b. 藤澤良祐「穴田南窯址群発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』II 瀬戸市歴史民俗資料館 1983
 - c. 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994
- (13) 愛知学院大学教授 藤澤良祐氏のご教示による
 - ・藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯 財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター 1997
- (14) a. 中野晴久「赤羽・中野『生産地における編年について』『全国シンポジウム『中世常滑焼を追って』資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所 1994
b. 中野晴久「常滑・渥美」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』 2005
- (15) 度会町遺跡調査会『麻加江城発掘調査報告』 1981
- (16) 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター「山神城跡」『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告 一第2分冊-1』 1992
- (17) 三重県埋蔵文化財センター『栗生城跡』 2002
- (18) a. 横山勝栄「新潟県北部の小規模山城について」『第8回 全国城郭研究者セミナー資料 シンポジウム「小規模城館」』 第8回全国城郭研究者セミナー実行委員会・城郭談話会・中世城郭研究会 1991
b. 横山勝栄「山間地域の小型城郭」『中世の城と考古学』 新人物往来社 1991



調査区全景(西から)



調査区全景(西から)



調査区全景(東から)



平坦地1(北から)



平坦地3(南から)



堀切1土層(東から)



堀切1(東から)



五輪塔(西から)